ぐん／＼と行き過ぎました。が、後で考へると、全く不思議な程、悲しくなりびどく昂奮したと言ふことです。

支那の乞食に就ては、變つた話が少くありませんが、紙數の豫定もありますので、甚だ簡單でしたが、これで一先づ支那の乞食のことは、千秋樂にいたします。

第十五章　大阪に於ける變態乞食

一、大阪に於ける乞食の特質

所替れば品替るの原則が、東京と大阪との乞食間にも通用するか否かは、多少の疑はありますが、少くとも大阪の乞食が、東京の乞食に比して、ひどくお喋舌りであり、多少陽氣であることは、事實が證明する處であります。

殊に關西地方は、巡禮が多く又山伏の如きものも少なくありません。それは病ひ其の他の事情で、相當資産を持つた家庭の子女達が、乞食姿となつて巡禮する者が少なくないからです。

ですから普通の袖乞ひ乞食でも、大抵の場合は、山伏姿をなし、順禮姿となつて袖乞ひをやつております。最もひどい不具者とか、老人とかは東京と同じように、稼ぎ場所を持ち、そこで袖乞ひをやつております。

大阪の乞食として、特記すべきものは、俗に言ふ御詠歌屋であります。即ち『ふだらくや岸打つ浪は御熊野の……』と美しい、しかし、何んとはなしに、人の感情をそゝる哀れつぽい節をつけて、門並を廻つて歩く順禮衆です。

此の種のもので極く働きのある女は一日二圓内外の收入にありつくそうです。ですから彼女達は、宿に歸へると一躍大盡とまでは行きませんが、可なり上氣焔で、手酌で一杯位ひは、ひつかけ顔で人を使ふ身分に早替りをすると言ふ始末です。

殊に人情の緻密な山間僻地に行きますと、無償で泊めて呉れますし、又歸りには米の一合も呉れます。

彼等は三升五升と溜めて置いて、それを米屋に運び金に替へるのです。又小金は兩替屋へ持つて行つて、多少の利金をとり兩替することになつておりますから、どつちにしても甘い話許りで

す。しかし、彼等の中でも老巧な者になると、次のようなことを言つております。

『田舍はあきませへん、ゼニを吳れませんさかへにな、米や飯位ひしか吳れまへんさかへ、商賣になりまへん、それに田舍の人は膽つ玉が小さおますさかへにな、却々餘計吳れまへんや』と得々としております。

全く山間の人は、米一升よりも十錢の金を貴いもの丶如く思つております。ですから乞食に惠む場合は、十軒が十軒共米か麥飯位です。

二、大阪の乞食賣笑婦

これは私が嘗つて、大阪の或る新聞社に勤めてゐた當時の體驗でありますから、今日尙此の種の賣笑婦がゐるか、どうかは保證の限りでありません。殊に今から十幾年かの昔のことですから當時の賣笑婦が活きてゐるか、死んで終つたかさへも判然いたしません。

兎に角、當時四十前後で、多少狂的な穢らしい女でした。其の女が〇〇〇〇であるのか、又は一つの策戰を圖らす手段であるか、其の間の事情は解りませんでしたが、常にロハ臺などで〇

〇〇〇〇痳てゐるのです。大抵の者は其の奇怪なる事實に、引きつけられ知らず〳〵の中に近寄ります。

何れにしても彼女は、立派な賣笑婦でした。わけても〇〇〇〇が專門で、當時可なりの評判になりました。私が勤めてゐた新聞社の連中も、時々これが探險に出かけました。が、何れも失敗して歸つて來たらしいのです。と言ひますのは、女が餘りにも穢らしく、恐ろしい病毒の持ち主であつたからです。

其後間もなく私は、上京しましたので、彼女に絡る多くを知りませんが、何んでも人の話によりますと、四五年前に死んだと言ふことです。つまり淺草に於ける土手のお金に、對抗すべきものが彼女であつたのです。

三、大阪乞食の昔噺

これは少しカビが生へ過ぎた話ですが、大阪の乞食として、殊に變つた話ですから、序につけ加へておきます。即ち延享年間の出來事ですから、今を去る百六七十年の昔のことです。

當時の乞食には、かうした奇篤な者は、決して少なくありませんでした。ですからこれに似た話は他にも幾らもあります。が、兎に角、以下のものは兎園小説の一節です。

○賢なる乞食の振舞

大道藝術三猫（昭和二年撮影）
（自稱東京浪界會員）

延享五年戊辰の春正月十三日の夜の明け方に、大阪四つ橋にて、其のほとりなる非人金五十圓拾ひしに其の包紙に宇津屋氏と書きつけてありしかば、限なくたづねて、終に其の主に返へしけり、金の主歡びて、謝物として金子少々とらせしかども、つや〳〵受けずよりて又酒代として鳥目三貫つかはしゝに、左の詩を相添へて、其の鳥目を返へしつゝ、非人は行衞知れずと。

橋上路邊一二錢、往來終日幾千人、死生富貴任天命、昨日錦日草莛今、

たからぞと思へば袖につゝみけり。ひらへばおもき障りなりけり（兎園小説）

無論、以上は事實小説の一節ではありますが、多少そこに誇張があつたり、事實と相反することが絶對にないとは言へませんが、それにしても當時の大阪に於ける乞食の一般を知ることが出來ます。

第十六章　各地に於ける變態乞食

一、東京市内に於ける乞食

東京市内外に散在する浮浪者の數は、無量數千の多きに達してゐるとのことです。ですから市の社會局には、これが撲滅をなすべく種々なる手段と方法を講じつゝあります。殊に第二の乞食たるべき乞食の子供に對しては、强制的に養育院なり、託兒所なりに收容させることになつております。處が彼等にとつて、子供は唯一の財産で、これをとりあげられることは、致命傷なのです。ですから彼等は、其の子供をとりあげられないように、多く其の存在を秘しております。

御參考の爲めに、東京市の草間囑託が調査せられた處の新聞記事を摘出しませう。

○東京市内に散在する子供の數

乞食の唯一の手段は、子供をつれてケンタ（袖乞ひをする場所）する事であるが、これを此の儘に捨て置くと第二第三の乞食を養成するも同樣なので、市の社會局では是れ等の兒童を託兒所養育所等に收容して整理しようと言ふ目的で、舊冬十一月二十八日から草間囑託が取調した。それによると現在市内で子供連れで稼いでゐる乞食の數は、四十七組（内男一六、女三一）で右の内、定居一家を借りてゐるものが二七、木賃宿一七、不定居三、住居は市内九、其の他は三河島、板橋、尾久、野方、日暮里、中野等である出身は府下の九が筆頭で、次は埼玉の七、其他各府縣である。

子供の數は百一人（内男五五、女四六）で一歲から十五歲以内、二歲と三歲の十二人、一歲の十人の順で、右の内貰子と稱する者八六、貰子五、借子八等で、學齡兒童中二十人は就學で、二十一人は無就學兒童で、學齡未滿が六十人ある。有籍は六一、無籍三八、不詳二である。

此の乞食が毎日自宅から、稼ぎ場所まで通ふには職業用（乞食着）のボロ着は風呂敷に包みて

普通人のように電車で來て目的地へ來てボロと着替へるのであつて、最近不景氣だと言つても一日二圓内外の貰ひはあるとのことだから、三日やればやめられぬとの諺も無理ではない。乞食窟とも言ふべき板橋の太郎作長屋は一日家賃十五錢で、家主は布團二枚を無料で貸してゐると。この長屋の十三組中には夫が目下刑務所に收容されてゐて、妻が後を働いてゐるのが四組あると、それで一家を持つてゐる者は、何れも細民以上の生活で朝酒まで飮んで出かけるのがあり、永いのは二十五年もやり、先祖代々乞食だと、言はれて滿足してゐるのもある。（東京毎夕新聞所載）

乞食になり得ない乞食の道行
大通世界（明治四十二年版）

これによつても乞食生活の一面を知ることが出來ますが、兎に角、彼等の武器とする子供を沒收されては、全く收入が半減します。ですから彼等が、子供のあることを秘し、蔭すのは無理の

ないことです。

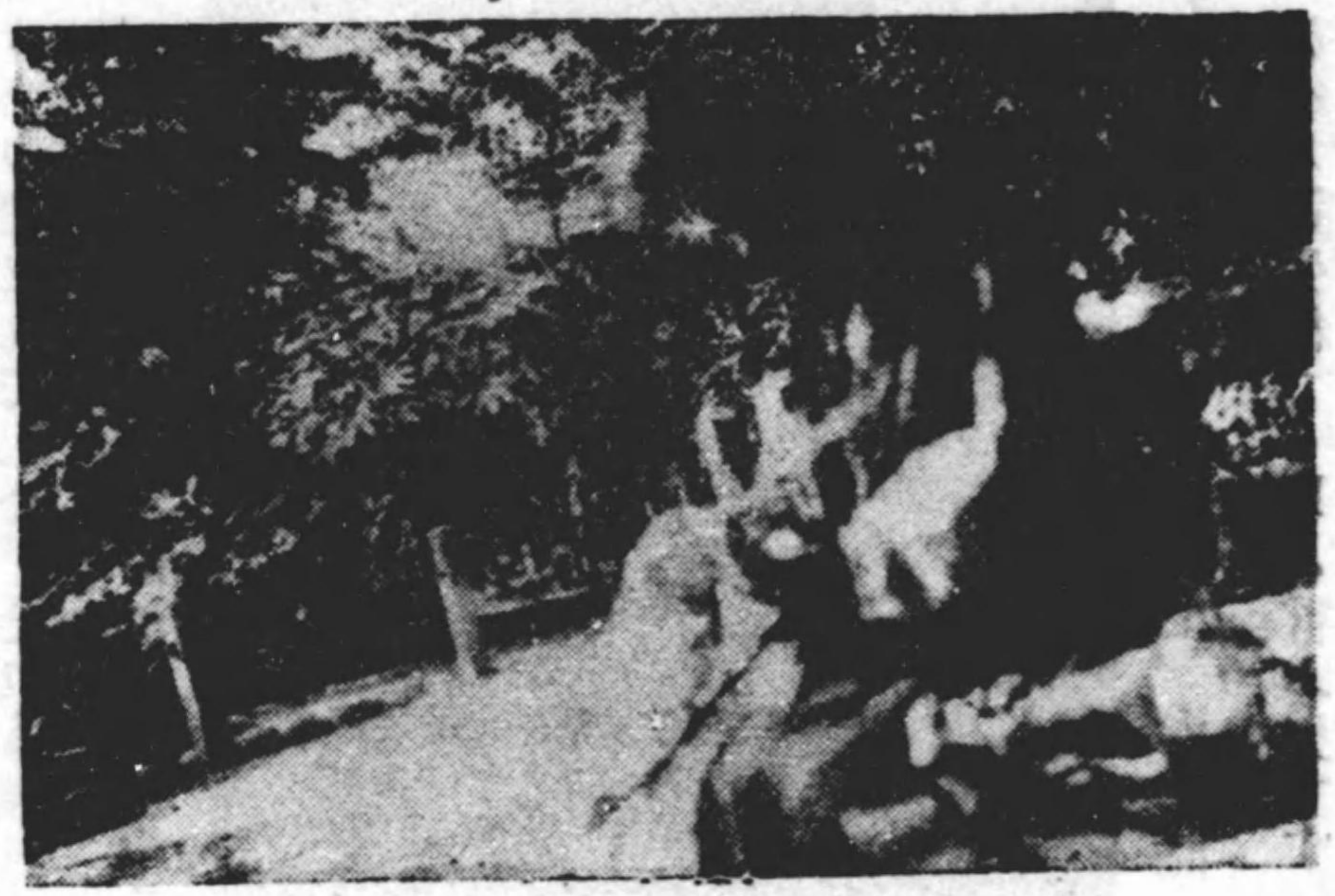
二、役者を情夫に持つた乞食

これはよくある話ですが、興行がシケて、トヤを食つてゐると、つれ〴〵の餘り、さま〴〵な戯らを考へたり、しでかしたりするものです。無論、これは其の中の一つの例で、或る劍劇役者が、名古屋地方を巡業してゐる時、行く先き〴〵で興業がひどくシケ、而かも、幾多のオンリオが出來、どうにも仕方なくて、トヤ許りしてゐたのです。

其の遣る瀬ないつれ〴〵の爲めに、役者達は毎日、あくび許りをして出立の日を指折り數へて待つてゐたのです。處がそこへ五十過ぎの女乞食がやつて來て、妙に若々しいことや、色氣たつぷりなことを言つて、一座のものを喜ばせてゐましたが、それも二度三度重なると、何んの感興も起きませんでした。

そこで一座の一人が『おい、どうだい、あの乞食を制服させる奴はゐないかね』と冗談半分に言ひました。

『幾ら物好きだつて、あれぢやしようがないよ、臭くてさ。』



稼き疲れた女乞食の居眠
本堂裏噴水池際（昭和四年撮影）

一人がかう答へました。

『そりや、そうだね、懸賞でもつかなくちや、あの穢ならしい婆ぢやね』

他の一人が言ひます。

『一圓の懸賞で制服させる者はゐないかね、僕は出すよ、一圓位ひなら』

第一の青年が言ひました。

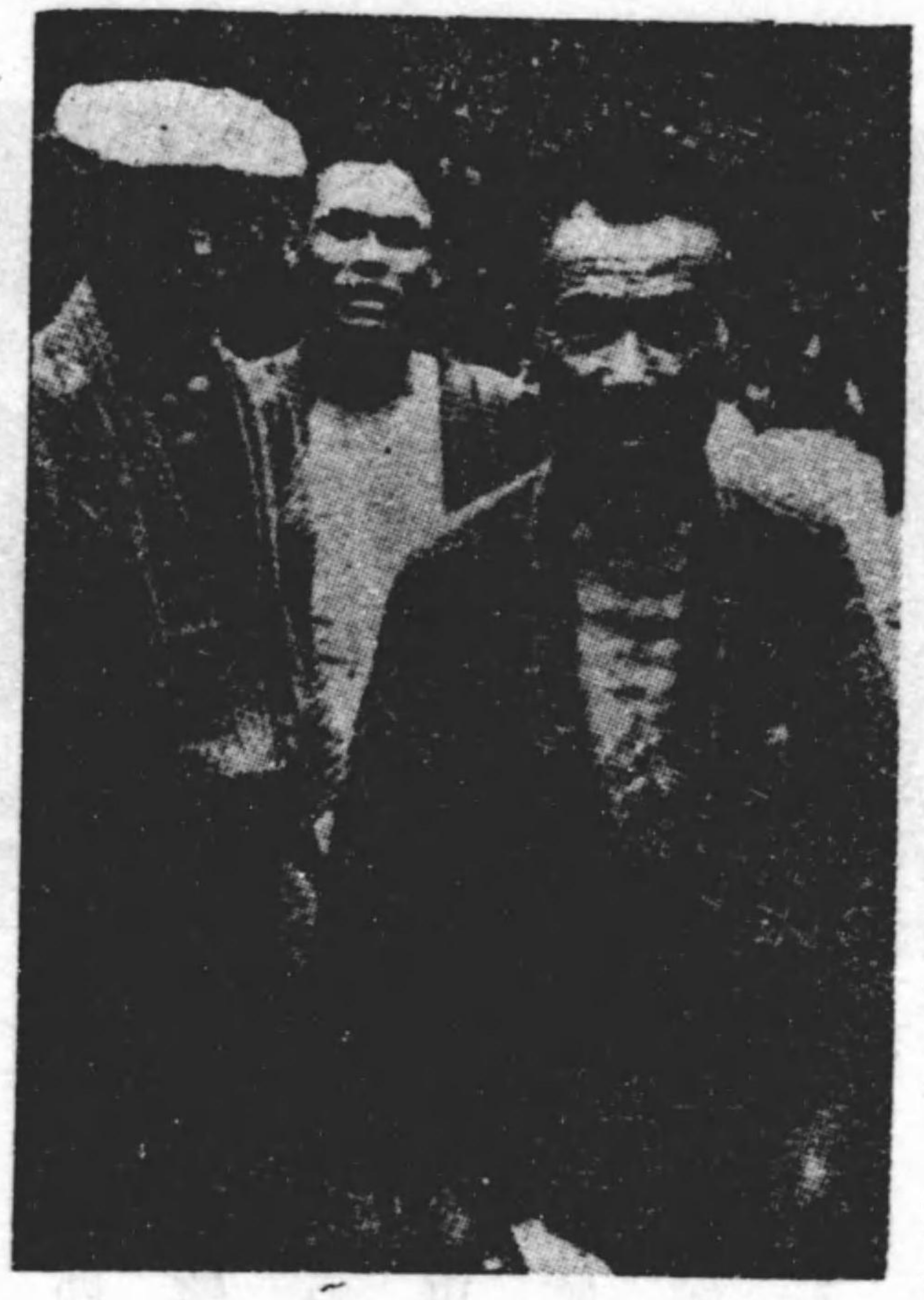
『僕だつて一圓位ひ出すよ、あの鼻のとれた婆さんを制服させる奴があればね』

それは第二の青年でした。

『そりや、面白い僕も出すよ』

それは第三の青年です。

かう言ふ風に五人まで、一関宛の懸賞をかけましたが、誰れ一人として其の任に當らうと言ふ者がありませんでした。それも無理のない話です。醜い穢らしい位ひなれば、我慢も出來ませうが、忌はしい病氣の爲めに、鼻が半分程腐りかけてゐるのです。それに今一つは、乞食仲間に共通のえたいの知れない中毒で、全身が絶えずルブ〳〵と、怪しく慄えてゐることです。だから少し神經質な男ならさわつただけで、病氣の感染を思はせる程の代物です。



大道藝術家猫吉
猫のさかり聲を賣る男

　處が一座の中から、其の懸賞に應ずる者が突然現はれました。そして、それは又意外にも平素無口で、女に話しさへもしない、よく言へば品行方正の男でした。

　彼は大阪生れで、Kと言ふ男です。彼がどう言ふ積りで、其の大役を引き受けたかは、今日に至るも尚ほ、依然として不明ですが、兎に角、さうした品行方正に近い男が、かゝる大役を引き

受けたことは、一座の者を呆然たらしめました。

　そこで彼は各懸賞者から、それ〴〵の擔保品をとつて、愈々仕事に着手しましたが、仕事は思つたよりもたやすく達することが出來ました。

三、握り飯しか食はない乞食

　これは明治四十年頃靜岡市に巣喰つてゐた乞食の話です。彼の名を俗に『とん〳〵』と言つておりました。それは歩く拍子に『とん〳〵』と調子を合せながら歩いてゐたからです。

　彼はもう三十近い男でした。が、どう言ふものか、如何なる場合でも握り飯でなければ食ひませんでした。普通の飯を呉れる處があつても、それを受け取らず必ず『おむすびにして下さい』と言ふのです。若し其の場合おむすびにしてやらないとすると、彼はそれを貰はないで惜し氣もなく行き過ぎました。

　土地の人でも彼が、どう言ふ譯けで、握り飯でなければ食はないかの原因を知るものは、殆どありません。

最も彼の職業が床屋であり、客の耳を切つて、而かも、それが原因で發狂し、中年から乞食になつたと言ひますから、或は耳を切れた人に對する迷信から、義理を立て、おむすび許りを食つてゐたのではありますまいか、或は發狂と同時に、味覺に變化を來したものとも言へますが、何れにしますも變つた乞食として、當時土地の人の評判の的になつておりました。

四、新宿の宿なし婆さん

或る親友が『乞食のことを書くのなら一度新宿へ來て御覽、可なり變つたのがゐるから』と言つて呉れましたが、つい〳〵無精をして出かけませんでしたが、あすこに五十過ぎの男の乞食と、八十過ぎの乞食婆さんとが居る譯けです。そして、此の二人は可なり變つた人間らしいのですが、生憎調査未了なので、何も書くことが出來ません。

昔の乞食タカモノの例
大通世界（明治二十四年版）

たゞ背中に『八十五サイ、ヤシナイテノナイバヽデス』と家鴨が田を踏んだような、おぼつかない文字で、大書した紙を背負つて、年がら年中、あのかいわいをうろつき廻つてゐる婆さんがあります。

少女誘惑は此の人相

別に珍らしい程のこともありませんが、私の親友高岡千尋と言ふ男が、『だから養つて呉れろ』と言ふのだらう。もう六十ばかり若かりせば養つてもやらうに惜しいことだ』と、何かの雜誌に書いておりましたが、如何にも穿つたことを言つております。何故なればかう書いて置けば、自分自身の養ひ口に困つてゐるようなどとは、誰れしも思ひません。全く立派そうで立派でないことが、あり〳〵と窺はれます。

それは兎に角、此の婆さんも人心の弱點をよく知る者として、又變り者として特記すべき價値

があるでありませう。

五、技倆の優れた乞食

昔から伊勢乞食と言つておりますのは、一體どう言ふ意味かと申しますに、それにはさま〴〵な理由がありませうが、其の重なるものは、變つた乞食が多くゐたこと、其の量が多かつたこと等でありませう。では伊勢乞食で、變つたものと言ひますと、先づ第一に例の『一文、やらんせ、やてかんせ』のお杉、お玉でありませう。が、これは既に天保時代に、その祖先を有し、而かも明治三十年頃まで、とても大した人氣を持つてゐたものです。最もお杉、お玉の姉妹は、明治中期の產で、わけても二十五六年が彼女達の全盛期で、それからだん〴〵と、衰へて行つたものです。彼女達は住來の片隅に、一段高い櫓を組み、そこで眞赤な蹴出しをちらつかせながら『一文やらんせ、やてかんせ』と、一種異様なる美音を發しつゝ踊り狂ふのです。

其の場合に若し大衆が、一文を投げ彼女達の體のどこにでも命中すれば、莫大な賞品を與へると言ふ條件で踊つてゐるのですが、不思議に命中しません。殆ど雨霰の如く投げつけても彼女達

は頗る巧妙に、それをはづして終ひます。そして、それと同時に、益々烈しく蹴出をちらつかせます。ですから少し甘い男など、それに釣り込まれ滅茶に投げたものです。

今一つ伊勢乞食で變つた處は、伊勢で有名な宇治橋の下に、一家一族の乞食の團體がゐて、橋上から一文錢を投げると、長い竹棹に一文錢を悉く通して終ふのでした。若し一人の乞食が過つても、他の乞食が見事に通して見せるのです。

ですから大衆達は、面白半分によく投げたものです。

これは今から三十五六年も昔のことで、お杉お玉と殆ど同時代の乞食です。

六、白粉をつけた青年乞食

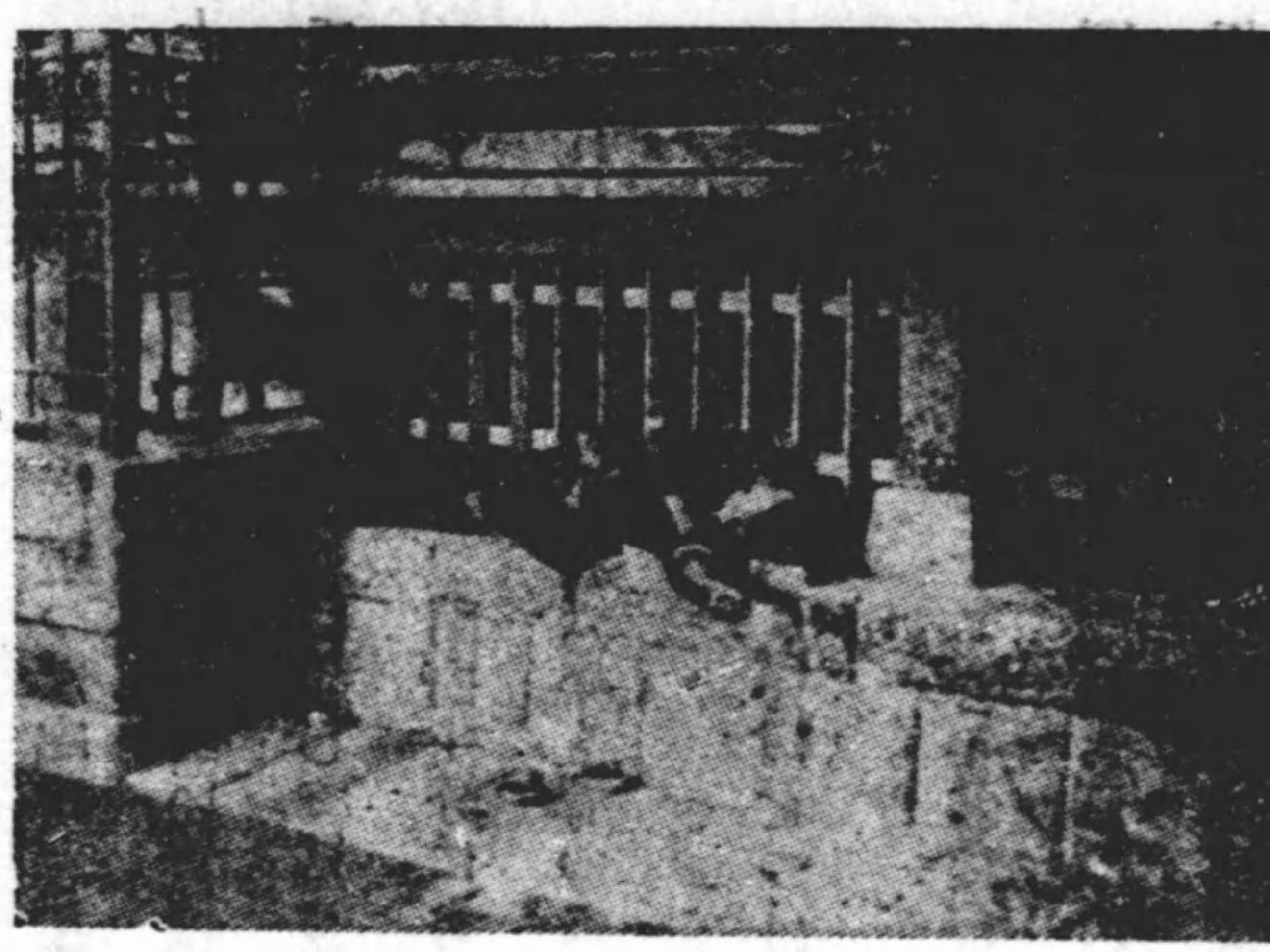
上野驛前を根城とする青年乞食がおります。彼はまだ二十歳を二つ三つ越した許りの青春血の頃の青年で、而かも、醜からぬ顏に、こて〳〵と厚化粧をし、金ぶち眼鏡などをかけ、時には中折帽子を被り、或は學生帽を或は麥藁帽子をと言つたように、彼は却々の衣裝持ちです。

殊に變つてゐるのは、何時でも鏡と白粉とを所持し、コテ〳〵と左官の二代をやつてゐること

です。彼はひどく從順で、誰の命令でも遵守し、えたいの知れない踊りを始めます。

彼は又車掌や、驛夫の眞似が上手で、殊に奥羽線や、常盤線など驛名を片つ端から連發し、大衆を呆然たらしめております。何んでも人の噂によると、彼は發狂前驛夫であつたと言ふことです。そう言へばうなづかれる節も少なくありません。

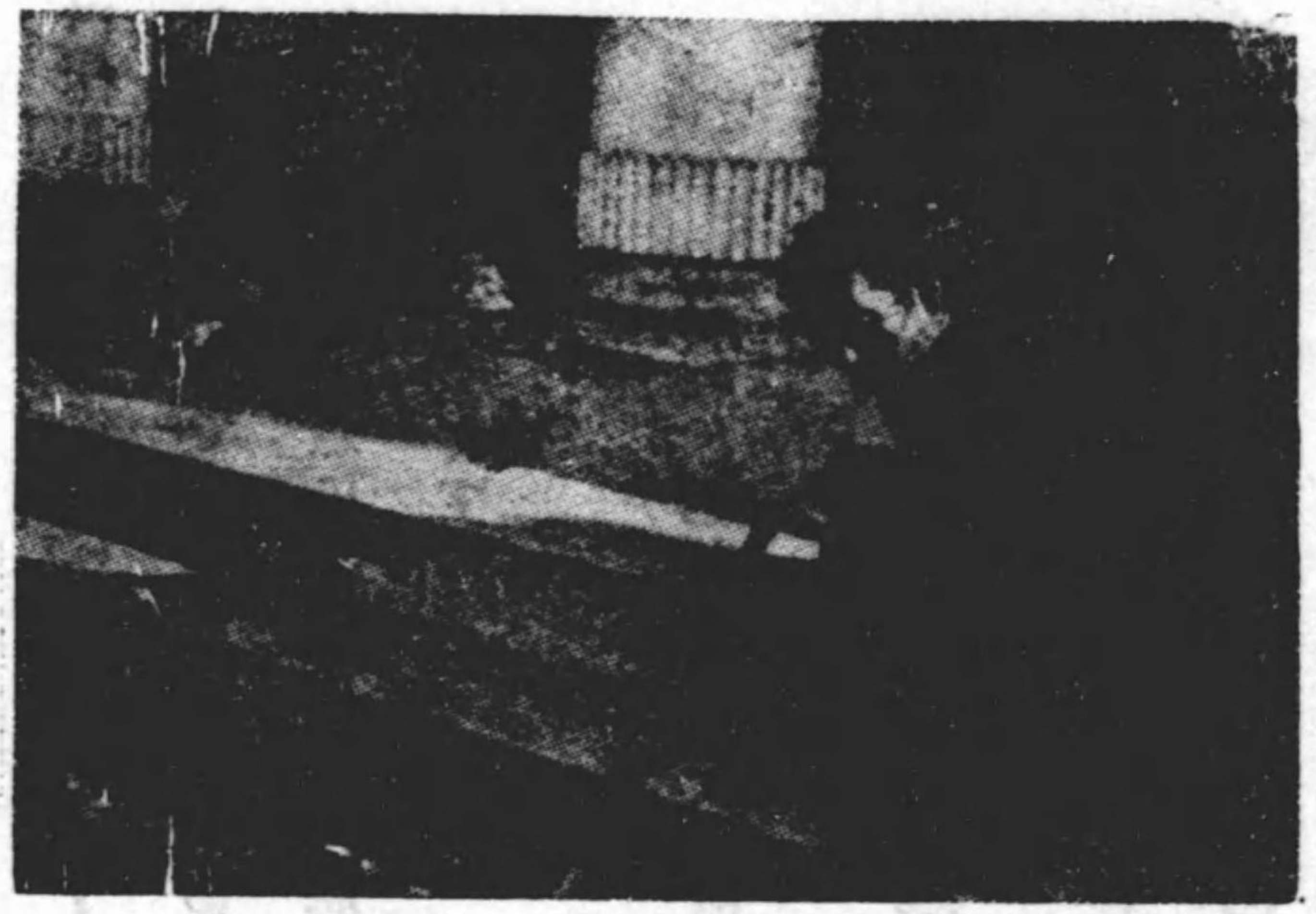
兎に角、彼は上野驛前の評判男で、あの附近の料理店や、カフエーを得意先きとしておりますが、如何にも從順で、人なつこく、愛嬌者なので、ひどく人にすかれております。ですから彼の食物は、吾々プロリタリア以上の贅澤を極めております。



エンコの寢臺（昭和二年撮影）

つい此の間も、お菓子をしこたま貰つてゐるので、冗談に『少し呉れないか』と言つたら、惜し氣もなく一摑み差し出しました。彼は全く從順其のもので、人の命令ならば、どんなことでも

決して厭とは言ひません、此の外に變つた乞食は、幾らもありますが、特に書き立てる程の特徴もありませんので、これ位にして置きませう。



彼等の寢室として藥師堂（昭和二年撮影）
（恐しい中毒者の群）

七、悲慘を偲ぶ乞食

私達東京人が一日も忘れることの出來ない、大正十二年九月一日の大震災當時を偲ばせるべく四角なボール紙に『震災の時に右手兩脚を怪我し、不具者となつたものなり』と拙ない筆で大書したものを背ひ、ぶく〳〵と太つた四十格好の女が、膝でづる〳〵と、如何にも不氣味悪く、のさばりながら、東京市内の夜店を廻つております。殊に近頃では、淺草へ入り込んでゐますので、平日でもよく見かけることがあります。

彼女は乞食としては、餘りにも太々しく、營養過多に落ち入り過ぎてゐますし、又顔かたちの道作が如何にも悠長に出來てゐますので、大震災で、折角人の急所を摑みながら、左程人に感動を與へません。でも二十貫近くもあらうと言ふ大女が、膝でのさばりながら、不格好に歩いてゐるのを見ると、急に震災當時の殘虐さが、眼の當りに見え、おひとよしらしい頑丈な彼女の顔が、一層悲慘に見えます。

第十七章　乞食の觀樂方法

一、煙草の吸殼を買ふ男

彼等乞食仲間は、どう言ふ方法で、どうして歡樂にとう醉してゐるか、そして又、どう言ふ方法で、嗜好を滿足してゐるか、これ等のことを調べて見るのも、決して無益なことでは有りません。最も彼等は袖乞ひが專業でありますから、人の情によつて、これ等の滿足を爲すことは言ふまでもありませんが、しかし、世ち辛い此の世の中で、大酒飲みや煙草喫みまでも保護しては呉れません。そこで彼等は、かうした嗜好をどうして滿してゐるかと言ひますに、大阪では人が喫み捨てた煙草の吸殼をたん念に拾ひ集め、それを粉にして二錢三錢宛、販賣してゐる店があります。即ち敷島なり、朝日なり、バットなりの吸ひ殘しを拾ひあつめ、それを一括して、一錢二錢と分割的に賣つてゐるのです。

カタリ乞食が金玉蹴られた處

東京では此の種の店を見受けませんが、大阪では可なり盛大に營まれております。

ですから、これを購求する者は、決して乞食許りではありません。

自由勞動者など仕事にありふれた場合、こゝへ駈けつけて、嗜好を滿足するのです。一錢も買へば一日喫ひ切れない程澤山呉れます。

又本所邊りでは、客の食ひ殘した殘飯を賣る店があります。これは大抵自由勞動者が、雨降りとか、病氣の場合に、仕事が出來ず永く遊んでゐる時、二錢三錢と買ひ歩いて、漸く生活だけを

續けて行く武器なのです。處が三錢も買へば、如何に大食ひでも滿腹疑ひなしと言ふ格安もので
すから、彼等にとつては、命の綱とも言ふべきものです。

二、蠅とり水を盜む男

カッパの願頤坊士
大通世界（明治二十四年版）

吉原遊廓内に、文字の上手な乞食がゐます。又書も相當に描きます。が、ひどく酒が好きなので、時々店先きのものを失敬したり、蠅とりのビール瓶を竹筒の中へうつしとり、それを人眼のかゝらない場所へ運び、浮きあがつた蠅をそつととり除き、チビリと舌打ちをしながら、とう醉に耽けるのが常です。ですから彼は何時でも、竹筒を放さず所持してゐます。

同じ盜むにしても廢物と言ふ點に於て、彼は得意になつております。

『店の品を盜むのは商賣に差し支へるが、蠅とりに使つたものは、どうせ捨てるものだから、それを失敬しても、大した問題ではない』と言ふのです。

手に下駄をはいたいざり
大通世界（明治二十四年版）

處が女乞食で酒飲みは、殊に始末が惡い。まさか酒代をくれろと袖乞ひも出來ませんので、懷中が不如意な時は自然搔つ拂ひなどをやらさるを得なくなります。

土手のお金も晩年には、賣春行爲が思はしく行かないので、女主人の小料理屋などを呪ひ、殘り酒やかん冷しを强請つて步いたものです。

そして、それに應じない時は、お酒の萬引をやつたものです。最近にもこれに似た女乞食がおります。

彼等は萬一にも捕へられ、警察署に同行を命じられても、留置される懼れは殆どありません。

二つ三つ賦と言ふ程橫つ面をぶんなぐられ、それで事濟になるのが、普通ですから却々氣が强い

これ程始末の悪いものはおそらく他にありますまい。

三、淺草の乞食居酒屋

淺草の浮浪者は、何れのバーで氣焔をあげるかと言ひますに、それは因より一様ではありませんが、しかし、其の多くがキネマ倶樂部から、大盛舘邊りの裏手の小つぽけな、立飲み專門の居酒屋です、殊にこゝには『花ちやん』と言ふ二十二三のきりつとした、どちかと言ふと、多少鋭さを持つた江戸ツ兒らしい姐御がゐる新門バーが、彼等仲間にとつては、非常に人氣があります。

昔の副業的乞食の例

花ちやんは其の名の示す如く美しく、すんなりとした綺量よしであるが、流石に浮浪者相手の女だけあつて、其の態度と言ひ、言葉の使ひと言ひ、江戸ツ兒そのものらしい感があります。

わけても窮強な醉つ拂ひの胸倉をとつて、眞つ白な細腕で、頑丈な日やけた男の面をはりとばす處などは、どう見ても女狹客としか見えません。

『なゝ何んだつて、金がない、よしあがれ、ひよつとこ野郎奴が』と引き倒し、蹴り飛ばす處などは、見るものをして慄然たらしめるものがあります。全く彼女の膽つ玉の太さには、大抵の者が驚かされます。

乞食賣春婦や、活辯の淸公なども時々、此のバーで見かけることがあります。此の種のものは大抵二貫から三貫位ひ、和製ウイスキーを引つかけるのが常です。いゝカモがかゝつた日などは、四貫から五貫位ひたて飲みをやつゝけます。

全く乞食賣春婦達の大酒飲みには驚かされます。一合せい〴〵七八錢の燒酎五貫を飲んで、腰も拔かさずへゞれけ姿で、公園内をのたうち廻ると言ふのですから、へまな男など到底彼女達の敵ではありません。

兎に角、浮浪者で昌へてゐるのは、何んと言つても花ちやんのバーです。最も場所から言つても、新門バーは地の利を得ております。

仲見店の兩側の薄暗い狹い横町が、通人横町であるように、池の端の裏通りは、通人若くば浮浪者横町とも言ふべき處です。ですから從つて彼女の家が昌へる譯けです。

著者附記　甚だ簡單ではありましたが、これで私の領分をすつかり書き終へた譯けです。文章が拙い處へ少しの技巧も加へず、又辶もかけず、お化粧もせず、只だ有りの儘、體驗した儘を紙の上に寫したに過ぎませんが、しかし、それが本書の目的であり飾り氣のない處に、事實が活きて來る譯けです、ですから豫め御了解を願つておきます。

第十八章　乞食經濟學

一、乞食のテクノクラシー

乞食は、現在、資本主義制度下におきまして、唯一の例外を爲しております、何故かと云ひますに、彼等乞食には、一般にテクノクラシーの原則が適用されてゐるからです。

殊に、彼等の中でも、俗にシロイと云はれてゐます芥箱漁りのバタ公などになりますと、殆ど例外なく、これが適用されます。それは云ふまでもなく、彼等の社會に、資本主義による制度がなく、搾取階級がないからです。稼げば稼ぐだけ、それだけの報酬が酬ひられて來るからです。

しかし、彼等乞食達は自分が生活する以外に、多くの場合、蓄積的な慾望を持つてゐません。最も蓄積するに不便な、腐敗物でもあるからでせうが、しかし、其の蓄積しない處が、乞食の乞食たる所以で、同時に、テクノクラシーの原則を受ける所以でもあります。

全く彼等の多くは、一日食ふだけの稼ぎしかしません。だから彼等の働く時間は、一日せいぜい二時間か、三時間、それも殆ど遊び半分で、決してあくせくしない處が、乞食らしい生活です。

此の意味におきまして、小生夢坊が、「幸福なるものよ、汝の名は乞食なり」と言ひましたのも、此の間の一面を暴露したものだと思ひます。

本當に、彼等乞食程、暢氣なものはありません。世の中の世ち辛さも、浮世のしち面倒臭さも、勇敢に蹴飛ばして、いとも煩はしい社會から開放され、自然の儘の生活を續けてゐるからです。

では何故に、彼等が幸福であるかと云ひますに、それは云ふまでもなく、彼等乞食が、資本主義制度下の領外におかれてゐるからです。金がなくとも生活が出來るからです。ですから若しも彼等の社會に、資本主義の制度が施かれたとしましたら、彼等は決して、今日の幸福は保つてゐられません。そこには無論、嚴然たる搾取階級が君臨して、彼等の血汐まで舐め盡すからです。少くとも自然の儘の生活は、これによつて根底から破壞されることになります。

處が、今日の趨勢を見ますと、彼等乞食階級にも、徐ろに資本主義的傾向が擡頭しつゝあります。例へば彼等乞食の中の一定の稼ぎ場を持つてゐる、所謂、ケンタの如きは、運上金と稱するものを稼ぎ高の一割乃至三割を搾取されてゐることです。そして、それはたゞに稼ぎ高の搾取許りではありません。其の他の生活にも、資本主義的な傾向が、だん／＼と濃厚になつて行くこと

です。

しかし、彼等の生活其のものは、一般社會から見られてゐるやうな、秩序のない、だらしのないものではありません。全く不思議な位ひに、秩序が整然として、少しの無駄もありません。それは何故かと云ひますに、彼等の生活が自然の儘で、嘘がないからです。若も彼等乞食社會に、嘘があつたり、見榮があつたり、意地があつたりしたら、決して其の生活は、自然とは云へません。又同時に、幸福であるとも云へないでせう。

意地もなく、嘘もなく、見榮もない處に、自然の美さがあるのです。又幸福でもあり得るのです。

ケンタの勞働時間や、方法に就きましては、前に述べた處でありますが、兎に角、彼等を統制する處の親分が、日々これを定めることになつてゐますが、彼等は、其の命令に對し、絕對服從で、少しの不平も、不滿も持たないで、與へられた方法と、時間に於て、懸命な努力を拂ひつゝあります。そして、其の勞働時間は、一定してはゐませんが、大抵二三時間平均稼げばいゝことになつてゐます。ですから其の配當も從つて僅かなものではありますが、しかし、其の代り彼等

の代表者が定められた料亭や、カフェーから、毎日吐き出される處のダイガラを集めて來ますので、結局、その方の配當で、最低の生活が出來ることになつてゐます。

何れにしますも、彼等の社會にも、何時の間にか、人口過多が生じ、漸次、資本主義的な傾向を持つやうになつたことは爭はれません。ですから結局、彼等ケンタ仲間は、資本主義的の制度下の例外を爲すものを云ふことが出來ない結果になるのです。

處が、一定の稼ぎ場所を持たない、ツブ、ダイガラ、ヅケ、シロイになりますと、純然たる搾取階級がありませんから、これは資本主義制度下の例外を爲すものと云へます。

つまり稼いだ丈けの勞働賃金を、其の儘、そつくり自己の所得にすることが出來ますから、從つて彼等の中には、剩餘の稼ぎを爲し多くの財産を蓄積してゐる者もあります。

しかし、大體に於きまして、乞食は、原始共産時代に見るやうに、多くの場合、行き當りばつたり式で、偶々よい獲物にありつきますと、その場でさつぱりと片附け、恰も江戸ッ兒のやうに、宵越しの金を持たないのが普通です。

でも、金がなくとも、食ふ物を持たずとも、決して不安など抱きません。それは「お天と樣と

おまんまは附きものだ」と云ふ彼等乞食哲學が然らしめるもので、乞食の幸福さを物語るものであります。

辨當欲しそな淺草女
（これでも立派な淺草女）
（昭和六年三月撮影）

本當に、彼等には生活難と云ふものがありません。金がなくとも生活が出來るからです。

しかし、かう云ふ風に、世の中が深刻になつて行きますと、彼等乞食社會にも、人口過多が生じ、遂には生活難に襲はれる時が來るでありませう。

二、乞食の資本主義的動向

乞食生活は、原始共産時代のやうに、最も自由な、自然な生活には違いがありませんが、しかし、原始共産時代にありましては、人一日の勞働力が、其の者一人の生活を支へる丈けの働きしか出來なかつたものです。ですから他人を使用して、其の勞働賃金の幾分かを搾取しやうとし

ましても、それは事實不可能であつたのです。

　處が、今日の乞食になりますと、乞食として、一日中勞働しますと、其の勞働した乞食一人が、一日の生活を支へた上に、尚ほ幾分かの剩餘を生ずるのが常であります。少くとも身分不相應な贅澤もしないで、こつ〳〵と懸命に、そして、眞面目に稼いでゐますと、別に堪えられない程の働きをしなくとも、亦、ひどくあくせくしなくとも、自然に剩餘が生ずるやうな立場にあります。

　殊に、乞食の中でも、最も稼ぎの少ない、最下級とされてゐるシロイにしましても、芥箱さへ絕えず漁つておれば、一日の生活を支へる位ひなことは、二三時間もあれば、優に間に合ひます。とりわけ仲間の者が、機先を制しない爲めに、夜明け近くから、かたことゝやつておれば、僅かに一時間位ひで、乞食一人が、一日生活する位ひは稼げます。

　最もこれは場所にも關係することではありますが、例へば日本橋や、銀座のやうに、使用人の多い場所を廻つてゐると、豫想外の獲物があるのです。と云ひますのは、使用人の誰れだつて、冷飯を食はされるのは、餘りいゝことでもありませんから、そいつを夜陰に乘して、こつそり芥箱へ捨てるのです。

　わけてもおこげなどが嫌いな女中さんになると、大量的に、こつそりと捨てるのが常です。ですからそんなのに、ぶつかつたが最後、一時間は愚か、五分間も要せずして、優に一日分の食料を獲得します。ですからこれは無論、一概には云へないことですが、夜明け近くであつたら、どんなしけの日でも、丹念に廻つてさへおれば、一時間位ひで一日分の食料位ひは獲得するそうです。ですから無論、それ以上稼ぐとしたら、當然そこには剩餘の生産をすることになります。でも、彼等シロイは、多くの場合、剩餘の生産をしやうとはしません。せい〴〵翌日の食料として保存しておくのが關の山です。

　最も頭のいゝ乞食になりますと、そうして拾ひ集めたダイガラを綺麗に整理して、腹の空いたルンペンに、一錢二錢で賣却してゐる者もあります。かうなつて來ると、乞食も資本主義制度下に於ける例外と許りは云へません。

　少くともこれは、乞食の資本主義的動向への第一歩と云ふことが出來ます。

　それから又、所謂袂乞ひの乞食で、然かも、ひどく吝な者になりますと、自分は芥箱などを漁つて生活し、大衆達から貰つた金は勿論、戸每に殘飯其の他を貰ひ集め、それを矢張り食へない

ルンペン達に、一錢二錢で賣りつけ、其の代金を蓄積してゐると云ふ資本主義的な乞食もあります。

わけても正月のやうな時になりますと、澤山なお餅を貰ひます。ですから無論、それは乞食一人が生活しても、尚且つ澤山な剩餘がありますので、それを乞食でないルンペンに賣り附けて、其の金で好きな食物を買つて食つたり、蓄積したりしてゐます。此の例は、無料宿泊所や有料宿泊所にも、よく見受けられます。つまり同宿間で、取引されてゐるのです。しかし、又公園内などでも、よく取引してゐます。そして、その取引の相手は、乞食でないルンペンとか、ツブ專門の乞食とかです。

とりわけ無錢、有錢の宿泊所などで取引される場合は、自由勞働者などが、幾日も〱降り續けられ、職にあぶれた時などに於て、最も繁く行はれるのが常です。

全くかうなつて來ると、乞食も立派な資本家です。少くとも資本主義制度下に於ける例外とは云へません。まして家作を持ち、高利を貸してゐる乞食に至つては、大資本家と云はねばなりません。

しかし、そうした例外は兎に角、一般乞食社會から見まして、乞食の資本主義的動向への最も顯著なものとしては、稼ぎ場所の賃貸借と、子供の賃貸借とであります。しかし、これは現在、エンコにはないやうです。

殊に、稼ぎ場所の賃貸借は、エンコにありましては、絶對に、彼等乞食が、自由にそれを行ふことが出來ない仕組みになつております。それは前にも申上げたやうに、彼等の親分が、多年の習慣上、其の稼ぎ場の上に、一つの權利を所得し、然かも、彼等乞食の指揮、命令をし、勞働方法の割り當て、報酬金の分配等をやつてゐる報酬として、一定の金額を搾取することになつてゐますので、乞食仲間にはどうすることも出來ないのです。

又子供の賃貸借に就きましても、今日では其の取締りも嚴重でもありますし、殊にエンコのやうに組織立つた場所にありましては、却々そうしたことを容易に行はれません。

でも、エンコ以外の土地に行きますと、今尚ほそんなことをやつてゐる者があるそうです。わけても場末の緣日などには、案外多く行はれてゐるらしいのです。つまり一人の乞食が、他の乞食に對し、一日幾らかの賃貸料を定めて、子供を貸與するのでありますが、明治時代には、これ

が最も盛んに行はれたものです。

ですから其の時分、子供の三人もあると、大盡遊びをして、樂々と生活して行かれたものです、そして、よく泣く醜い子供程、賃貸料が高かつたと云ふのですから、全く世の中は不思議です。

それから乞食の中でもツブ専門の、然かも、一定の稼ぎ場所を持つてゐる袂乞ひ乞食になりますと、昔から時偶ま、とてつもない資本家があります。例へば前にも書きましたやうに、吾妻橋上に、三百六十五日、殆ど一日の如く坐り切つております爺さんの如き、稼ぎ場に來れば、乞食には違ひがありませんが、家へ歸へりますと、金貸しの旦那さんで、どてらでも着込んで、顎で挨拶してゐると云ふ男なのです。

又品川遊廓を繩張りとしてゐました夫婦者の乞食の如きは、澤山な家作持ちで、繩張りを廻る場合は、見るも憐れな姿でゐても、いざ家へ歸へると、大家の旦那として、肩で風を切つてゐると云ふ始末です。

又淺草の區役所横町で、衣替へをしてゐた乞食の如き、三河島かなんかに、立派な家を持ち毎日電車で通勤してゐたものです。ですからかうなつて來ると、普通のサラリーマンと何等撰ぶ處

がありません。

處が、乞食が剩餘の稼ぎをしたり、蓄積をするのは、乞食本來の性質に反するもので、乞食はどこまでも、原始共産時代のそれのやうに、行き當りばつたり式の生活を爲すべきものです。つまり江戸ツ兒のやうに夜越しの金を持たない處に、幸福さがあるのではないでせうか。

だが、しかし、今日の趨勢は、漸次乞食階級にも、人口過多が生じ、遂には生活難を叫ばしめる結果となりますので、乞食と雖、剩餘の稼ぎをしなければ、安心して生活することが出來ないまでにだん〳〵と押し迫つて行くでありませう。ですから今日では、種々なる戰術を勞したり、又さま〳〵な方法によつて蓄積したりしております。そして、その蓄積力の最も發達したのが、乞食淫賣婦です。

三、乞食の貨幣制度下の例外

彼女達は、どんな場合でも、無一物と云ふことは絶對にありません。殊に、蓄積力の發達したものになりますと、常に數十圓を懐中深く納つてゐたものです。

乞食と雖も貨幣制度下にありましては、貨幣の約束を受けない譯けには參りません。しかし、彼等乞食の間には、貨幣を全然無視した處に、又彼等の生活のあることも否めない事實です。つまり彼等の生活が、原始共産時代のそれのやうに、金がなくとも活き延びられるからであります。例へば衣類は、芥箱その他の芥溜を漁り、又は道路に棄てられた廢物を利用し、食はシロイにより又はダイガラを貰つて生活し、住は露天野宿を原則とするが、しかし、時には無料宿泊所を利用することも出來ます。

かう云ふ風に、乞食は、本能的な衣食住に對し、貨幣を必要としません。つまり彼等は、一錢の金がなくとも、衣食住に事缺かないのです。そして、それが乞食本來の性質に適合したもので、貨幣に約束されない處に、彼等の幸福さがあるのです。

しかし、流石に嗜好になりますと、事贅澤に屬しますので、貨幣を全然無視し、度外視した處にこれを滿すことは頗る困難であります。

しかし、これにした處で、必ずしも貨幣の存在を必要としません。事實、金なくて嗜好の總てを滿す方法があります。

殊に、其の中でも最も容易いのは、煙草であります。乞食が煙草を喫むなどは、贅澤だと云ふ向もありませうが、しかし、それが廢物利用で、金なくて充分に喫めると云ふに至つては、寧ろ奬勵してもいゝ譯けです。即ち乞食のエンタ拾ひがそれです。エンタは煙草のことで、同時に、ドウロカとも云ひます、ドウロカとは道路で拾ふからです。

何れにするもこれ等の言葉は、彼等仲間に於ける用語なのです。バタ公は拾ひ屋の代名詞で、バタヤと區別せねばなりません。何故なら、バタヤは拾ひを業とするもので、立派な職業人です。處が、バタ公は、拾ひの代名詞には違ひがありませんが、今日ではタカリの如き不良を意味しておりますから、兩者は全然違つたものです。

ドウロカのバタ公は、乞食よりも寧ろ乞食に類するルンペン達に多いのです。それは乞食が、エンタのやうな刺戟物を多く欲しないからです。それ程乞食には、氣慨がないのです。

ルンペンの街淺草あたりでは、一定の職を持つた者ですら、エンタは、ドウロカで、これを充たすと云ふ人も少くありません。私の知人にもかうしたものがありますが、彼は一日の收入が三十錢位ひにしかなりませんので、食つて十錢宿泊所に泊まると、煙草錢の出所がありません。で

すから彼は、三百六十五日と云つた處で、雨が降れば駄目だが、雨さへ降らなければ、殆ど毎日のやうに、通勤の途中、鵜の目鷹の目でドウロカを捜し廻つてゐます。
でもかう云ふ人は、決して彼一人ではありません。他にも幾らもあります。それ程エンタの拾ひは、誰れでも出來るのです。つまりルンペン修業の第一歩なんです。況んや、乞食のやうに、恥も外聞もなく、一日中ぶら〳〵してゐる者になりますと、とても澤山なエンタが拾へることでありませう。
處がです。これが酒になりますと、それ自體が、第一液體でありますから、無論、往來などに轉がつてゐる譯けがありませんし、又酒は煙草の吸殼と異なりまして、廢物利用の道が馬鹿に廣いから、これを所持する者も、容易に棄てません。ですから其の當然の結果として、金がなければ、容易にこれを得ることが出來ないことになります。しかし、これとても次の三通りによつて、これを求めることが出來ます。
其の一つは、これから夏場になりますと、料理店とか、カフエーとか、其の他の飲食店などに、蠅とり器へビールを入れて、蠅をとる家があります。

彼等は、そう云ふ家を睨んで、氣の拔けた蠅とり器中のビールを強請るのです。が、無論、そう云ふものは、廢物利用の途がありませんので、大抵の家が、其の淺間しさに同情して、澁々でも呉れてやります。しかし、それでも彼等は、蠅を棄てながら如何にも美味そうに飲んでおります。
嘗つて、淺草名物女であつた土手のお金の晩年は、こうしたビール許りを覗つて歩いてゐたものです。現に今も其の二代目が、矢つ張り吉原方面に現はれて、氣の拔けたビールを強請つてゐるそうです。
其の二は、客が飲み殘して行つたビールです。これも普通人が飲めないまでに氣が拔けたものですと、どこの店でも呉れるようです。しかし、それも大量的の場合は駄目です。
其の三は、矢張り客が飲み殘した燗冷しの酒ですが、これは廢物利用の途が廣いので、餘程、氣の向いた乞食でないと呉れないそうです。つまりコツク其の他の板場に、好感を持たれてゐる者のみが、其の恩典に預るのです。
其の四は、酒屋の尻びき酒ですが、これは無論、金がなくては駄目です。しかし、少々腐敗し

たものとか、又特別に好感を持たれてゐる乞食になりますと、時には芥だらけの奴を吳れることもあるさうです。しかし、これは極く例外中の例外に屬するものですから、一般的には駄目だと云はねばなりません。

兎に角、乞食が、酒を强請つて、たゞで飲む方法は、先づ以上の三通りでありますが、しかし、市營其の他の無料乃至有料の宿泊所に、宿泊してゐますと、時々恩賜金其の他の同情金で買はれた酒が、少くとも一ケ月一回位には、一人當り一合乃至二合平均、下賜されることがあります。ですから其の場合、宿泊所に泊つてゐさへすれば、必ずその恩典に浴することが出來ます。そして、此の時こそ、灘の生一本のやうなよい酒が飲めるのです。

まあ、大體そんな譯けで、三百六十五日、一錢の金がなくとも、着物を着て、飯を食つて床の中に寢て、煙草ものみ、酒も飲めると云ふ次第です。

殊に、彼等の中には、食べ物などを賭けて勝負を爭つたりしてゐます。これとても矢張り金がなくとも出來るのです。

ですから全く乞食生活と云ふものは、不便なやうで、便利なものです。又不幸此の上もないや

うで、幸福此の上もない陽氣な生活なのです。

しかし、ルンペンにして、無料宿泊所を占領することは、却々容易ならぬことで、誰れでも利用が出來るやうには書かれてゐるが、これを占領するには、新參者の乞食では、到底出來ないことです。と云ふのは、何時も大入り滿員だからです。

處が、それよりも、もつと困難なのは、性の解決です。これは乞食と雖ど、相手方の承諾なくては、容易に解決が出來ません。同情による性の解決と云ふものが存在しない以上、これだけは袂乞ひでは、ちよつと無理らしいのです。何故なら、元來性の問題は、當事者の合意によつて、始めて解決さるべき性質のものですから、其の合意が成り立たない處に、性の解決はあり得ないからです。

ですからオカン(乞食淫賣婦)にした處で、矢張り合意が成立しないことには、無論、問題は解決さるべきものではありません。と云ひますのは、彼女達も矢張り生活の爲めの勞働なのですから、其の勞働に對する賃金を要求するのは、寧ろ當然なことと云はねばなりません。最も彼女から積極的に戀をしたとか、同情した場合は、固より問題外ですが、然らざる場合は、需要供給の

原則によつて、其の報酬として勞働賃金の支拂を要するのは云ふまでもありません。

たゞこゝに一つの例外を爲す場合は、彼女達の仕事に對する見張り役を勤めた場合に、其の報酬として、性を解決する場合です。つまり報酬に對する報酬なのです。しかし、これは事實、殆ど認められない程、例外に屬することです。と云ひますのは、彼女達には、餘りにも多くの情夫があり過ぎるからです。つまり情夫がないとしても、既に先客があつて、それが完全に任務を果し、頑張つてゐる間は、どうにもならないからです。

だから結局、性の問題だけは、以上の僅かの例外があるたけで、當事者の合意によるの外は、先づ不可能と見なければなりません。

四、乞食の勞働賃金

乞食の勞働賃金に付きましては、大體以上述べたやうなもので、金錢的に、完全に見積り得るものとしては、ケンタの場合とツブの場合と、乞食淫賣婦の場合で、其の他の場合は、多く金錢に見積ることが出來ません。

殊に、シロイの如きは、主として廢物のみを目的とするものですから、假令、これを金錢に見積つたとしても、僅かに二錢三錢の經濟的な價値しかありません。

又ダイガラにした處で、經濟價値から云ひますと、極めて低い價値しかありませんので、其の勞働賃金も亦、誠に低いものであります。

それから又、一定の場所を持たないツブ專門の乞食にありましても、各人の働きと、場所によつて、甚だしく其の賃金を異にします。

ですからこれを一概に云ふことは、無論出來ないことであります。

殊に、マノよい日と然らざる場合とによつても、ひどく高低がありますし、又物日などと平日とは、著しい差異があります。ですからこれ等も一々調査した上でなければ、到底正確な數字は出ません。しかし、大體に於きまして、今日の不景氣では、平均五十錢位ひしか稼げないそうです。

だが、頭腦のよい、稼ぎ上手なものになりますと、平均圓助程度の稼ぎを樂々とやつてゐます。

ですから同じツブ專門の乞食にありましても、甲、乙、丙と云つたやうに、稼ぎ高の階級があり

ます。わけても電車で通勤するやうな乞食や、有料の宿泊所に泊つてゐるやうな乞食になりますと、無論、圓助以上は、優に稼ぐらしいです。又事實それ位ひ稼がなければ、家を持つて、電車に乘つて、樂々と生活して行くことは出來ません。

最も乞食は、原則として夫婦共稼ぎですから嬶アを養はねばならないと云ふやうな心配はありません。赤ん坊だつて稼ぎの材料になるんですから、此の點に於ては乞食は、とても强身です。

乞食の中でも稼ぎ手は、所謂オカンです。彼女達の勞働賃金は、世にも珍しい程の安直さではありますが、場所も要らなければ、化粧代も、衣裝も要らない彼女達は、相當な報酬に惠まれてゐたものです。しかし、前にも云つたやうに、見張り役がゐなければ仕事が出來ませんので、その見張りが情夫でない限り、一定の報酬を支拂はねばなりません。で、結局、彼女達の仕事に對する支出と云ひますと、此の見張りに支拂ふべき一定の報酬だけです。そして、此の報酬は、人によつても多少異ふかも知れませんが、私が聞いたのは、二割とか云ひました。先づこれが資本と云へば資本です。

そこで此度は、彼女達の勞働賃金のことですが、これは今日の檢閱制度では、的確に書き現は

すの自由を持ちませんので、殘念ながら省略せざるを得ません。しかし、如何に最低料金を以て勞働に服するとは云へ、年がら年中穴開き錢許りが彼女達の報酬ではありません。時にはトヤと稱するホテルへ連れ込まれることがあるのです。そして、そう云ふことよりよきカモを摑んだ時は、圓助などの顏も見られるのです。でも今日の不景氣では、それもどうだか——二三年前までは、圓助を摑んでほく／＼顏して其の翌朝、和製ウイスキーを二貫三貫とあふつて、エンコに大氣焰を擧げてゐるのをよく見受けたものです。

第十九章　乞食になり得ないルンペン

一、ルンペン中の最大不幸者

昔から乞食を三日すれば忘れられないと云つてゐますが、それは或る一面に於て、確かに其の間の消息を物語るもので、同時に、乞食生活の眞相を暴露するものです。本當に乞食は、世間一般に考へてゐる程、苦痛の伴ふものではありません。それは彼等乞食が、世間の煩しさから解放

され、而かも、金がなくとも立派に生活して行けるからです。

最も彼等乞食にしても、人間である以上、否、一般動物が活き行く上に於て、よりよき生活を欲するのは、自然の勢ひですから、彼等にした處で、よき生活を望まないでは有りません。

けれども、それはわれ〳〵普通人が欲するやうに、身分不相應な野心は持つてゐきせん。うまい物でも澤山食つて、温かい寢床に寢られゝば、それで慾望の總てが達しられる譯です。

殊に、彼等は、皆さんが考へてゐる程、不幸者とは思つてゐません。考へる丈けの氣力に缺けてゐるからではありますが、事實彼等は金がなくとも少しの屈托を感じませんから、此の點に於て、頗る强味です。一時間も廻つてくれば、どうにか命を支へる丈けのパンにはありつけます。又大道に座つておれば別に激しい勞働もしなくとも、かつたい帽子位ひ見せておれば、食ふ丈けの金は充分惠んで與れます。全く彼等の仲間が云ふように、「お天と樣とおまんまは附きものです」これが暢氣でなくて何んでありませう。

最も冬場など少々寒むいことは寒むいが、しかし。これだつて、習慣性になつて終ふと、恰も中毒症のやうに、普通人が感ずる程のこともありません。事實彼等の肉體は、鈍感其のものになつております。

本當に彼等の肉體は、不思議な存在です。腐敗物を食つても、少々毒素を含んだものを飲んでも下痢一つしないと云ふ調法な躰になつております。此の點は、お醫師樣でも、有馬の湯でも、聊かおつたまげるでせう。とりわけ彼等が、一番力强く感ずるものは、全然羞耻の觀念がないことです。衛生思想が、絶對に缺けてゐることとです。

此の二つの欠陥は、人間をして如何に大なる力を與へることとか。肉體的に、精神的に、何ものをも斷固として征服して終ひます。それ程力强いことがありませうか。此の意味に於きまして、普通人の生活が、餘りにも形式に捉はれ、美粧美服に努め、衛生思想に拘泥し、小心よく〳〵たるものがあるのは、人間生活の上に大なる支障を來たすものと云はなければなりません。少くとも人間をして、餘りにも潔癖症たらしめ、小心にして弱々しくする結果となります。

今日大人物が出ないと云ふのも、かうした理由が、其の一つの原因と見ることも出來ます。否、美粧、美服の如き形式的な、薄つぺらさに拘泥し、內容の重大性を忘却してゐることに近因するものが多いのです。此の點は將に子女の養育、教育上に深く注意する處がなければなりません。

少し餘談に觸れましたが、兎に角、彼等が幸福であると云ふのも、蓋し此の二つが缺陷してゐる爲めであります。つまりの此二つが缺陷しておればこそ、彼等は、社會に對する憤激もなく、執着も持たず、行き當りばつたり式に、暢氣に氣樂な生活が出來るのです。そこです、目的も、希望もない處に、自然の味ひがあるのです。自然を味ひ得る彼等には、無論、不平も、不滿もありません。

ですから其の當然の結果として、彼等乞食が一番苦手であるのは、面倒臭い社會に拘束されることです。しち面倒臭いことが、大禁物なのです。これが嫌ひな爲に、面倒な社會から逃げ出したとも云ひ得るのです。拘束の多い社會。彼等は、考へただけでも嘔吐を催するでありませう。其の面倒な社會から解放されてゐる彼等です。幸福でなくて何んでありませう。

では、どう云ふ種類のルンペンが、最大不幸者かと云ひますに、それは乞食になり得ないルンペン。つまり紙一重を破れば、そこには乞食と云ふ幸福な境遇が待つてゐるが、しかし、その紙が、どうしても破れないで、あがいてゐるルンペンプロレタリアです。云ひ換へますならば、極めて薄い紙ではありますが、それがどうにも破れないで、社會のどん底に、あがきながら活きて居るルンペンなのであります。ですから其の生活程度は、乞食と選ぶ處がないのですが、たゞ紙一重の垣がある爲めに、乞食のやうに氣樂な世渡りが出來ないのです。

それは彼等に、氣力が殘つてゐるからです。

微かながらも、社會に執着を持つてゐるからです。人間並みの希望があり、目的があるからです。其の目的、希望がある限り、彼等は、どうしても幸福になり得ないのです。不幸のどん底に活きてゐなければならないのです。

つまり彼等には、衞生的な觀念は去つてはゐるが、しかし、羞恥の觀念だけは、絕對に去り得ないので、社會に對する憤激もあり、不平もあり、不滿もあるのです。そして、それと同時に、微かながらも執着をも持つてゐるのです。

それは彼等に氣力があるからです。しかし、其の氣力は、徐ろに去つては行きますが、それはほんの僅かのものに過ぎません。多くの場合は、乞食になり得ずして、苦み拔いてゐます。金がなければ活きてゐられない彼等だからです。假令、一日三錢にしろ、四錢にしろ、金がなくては活きられない彼等である限り、乞食のやうな陽氣さでは居られません。そこが彼等ルンペンの苦

しい處です。又不幸のどん底にもあるのです。

そんな譯けで、彼等ルンペンの中には、其の苦しみに打ち勝てず、遂には反社會的な考へを起すやうにもなるのです。又不良の群れに這入つて、人を恨んだり、世を呪つたりするやうになるのです。

ですから此の種の人間は、乞食と違つて、社會の一員としての人生觀を持つております。全く乞食は、他愛もない考へしか持つてゐませんが、乞食になり得ないルンペンになりますと、人間らしい人生觀があつて、社會に對する憤激も亦、人間並みに抱いてゐます。それは彼等ルンペンに氣力があるからです。慾望が去り切らないからです。

何れにするも、此の世の中て、一番不幸のどん底にある者は、此の種のルンペンで、これ以上の不幸者はない筈です。ですから私は、これ等に關して、倘ほ詳細に述べて見ようと思ふのであります。

二、乞食になるまでの道程

一口に乞食と云ひましても、以上述べましたやうに、さまぐな階級的な類別がありますので、無論、一概には云へませんが、少くとも袂乞ひ乞食になるまでの道程には、可なり複雑な生活的な葛藤があります。ですから乞食にならうと云つて、直ちになり得られるものではありません。人が階級的に、一歩々々上へ進むやうに、下へ降りることも亦、肉體的若くは、精神的な訓練が必要であります。此の訓練が積まなければ、到底、乞食としての資格はありません。だのに世の中の人達は、乞食になることを以て、一番容易なことのやうに考へてゐるが、しかし、それは大きな間違ひで、これ位ひ肉體的若くは、精神に訓練を要するものはありません。

若しもこれ丈けの訓練が、故意に出來る人でしたら、それは人間以上の偉大な人と云はねばなりません。少くとも聖人です。神の如き貴き人です。昔親鸞聖人が、乞食坊主を裝ひ、托鉢をやつて廻られた足跡が跡されてゐますが、これは親鸞のやうな賢哲な人によつて始めて出來得る仕事です。

本當に、何がむづかしいと云つても、常人が、全然乞食になり得る程、至難なことはないと思ひます。何故なら、打たれても、叩かれても、乃至は、踏んだり、蹴つたり、其の他ありとあら

ゆる侮辱の限りを盡されても、尚且つ謝罪して逃げ出す程の修養。それがどうして、われ〳〵凡人に出來ることでせうか。

僕は、此のことをはつきりと感じたことがあります。それは嘗つて、ルンペン修業の第一歩として、意識的にルンペンの服裝して、ルンペンの研究をやつてゐたことがあります。其の時分、某署の刑事から、ルンペン扱ひをされたので、遂に言ひ爭ひとなり、某署まで連行されました。が、時恰もルンペン狩りだつたので、直ちに司法主任の調べを受けましたが、どうした間違ひか、拘留處分に附せられるやうな調書が作製されたので、元來法科出の私です。堪り兼ねてぐん〴〵突つ込んだものです。

無論、最初からお互ひが、感情と感情とが衝突した丈けのものですから、身には一點の疚しさもありません。潔癖で、馬鹿正直な私です。惡いことの出來る程氣骨のある男でもありません。だが正しさの前には、一歩も退かない强情さがありきす。正義の前には斃れても熄まないと云ふアナクロニズムな思想の持主であります。

そんなことが禍して、第一司法主任の感情をひどくそこねてゐたものです。殊に正式裁判を仰

ぐと云つたのがツンと來たらしいのです。其の證據には、「ルンペンの癖に生意氣だ」と呶鳴りつけました。そして、その結果が檢束の燒き返しとして、都合五日間厄介になつた譯けです。しかし、其の五日の間には、一生を記念する程の重大な侮辱を受けました。とりわけ第三司法主任の某は、「强情だ、生意氣だ」と許りに鐵拳の制裁を呉れました。

處が、第二司法主任の內田警部補こそは、全く公明正大な態度を以て、ルンペン石角春之助の上に、取調を進めて行きましたが、何等取調べる事項を持たない事件なので、彼氏私を釋放しようとしましたが、第一、第三司法主任が、「こんな生意氣な野郎は、謝罪するまで留めておくのだ」と强固に頑張つた爲めに、その意を得ませんでしたが、しかし、僕はわれ〳〵大衆を直接に、取締り、支配し、保護する處の司法警察署にかうした公明正大な彼氏の存立することをどんなにか心强く感じたことか。希くば今後彼氏が、破天荒の成功を爲し、われ等の警察に氣焰をあげられんことを蔭ながら祈つてゐる次第です。無論、それはちつぽけな個人の感情許りではなく、全日本大衆の幸福を增進する爲めに祈るのです。

兎に角、此の一事によつても、僕は、到底、乞食の眞似など出來る人間でないことがはつきりと

解りました。そして、それと同時に、乞食になり得ることが、如何に困難であるかを的確に知りました。

まして衛生思想などあつては、肉體的にも到底忍び得られません。又冬は寒く、夏は蚊に責められ、とても堪つたものではありません。で、結局、精神的にも、肉體的にも、われ〳〵のやうな社會意識の强い、神經過敏の者にあつては、どつちにしても勤まりません。僕は、完全にへこ垂れました。僕のやうな凡人に勤まる難行苦行ではありません。

つまり紙一重の處までは、行けないこともないでせうが、其の紙を破ることは、われ〳〵凡人には出來ない藝當です。ですからこれが完全に破れる者があつたとしたら、其の人こそ親鸞のやうな賢哲な人か、でなくばルンペン修業を卒業した者かでなければなりません。で、結局、乞食になるには、必ず一定の修業をしなければならないことになるのです。そして、其の修業は、普通人にとつては、とても堪え切れない苦痛なのです。

最も諸國を巡禮して廻る山伏、がんじん坊主、巡禮などは、純然たる乞食でありませんから、これなら誰でも出來ることです、だが、袂乞ひ乞食になると、以上述べたやうに、一定の修業を經ないことには、所詮つとまりつこがありません。

そこで私は、此の兩者を一層明瞭にする爲め、項を改め詳細に述べることにします。

三、乞食と紙一重の生活

乞食になる道程として、研究を要することは、乞食と、乞食になり得ないルンペンとの境を爲す處の紙一重、これ等の生活を知ることが、最も肝要な事項であります。形式上の生活は、乞食と殆ど同一でありますが、實質上から見ますと一方は金がなければ生活が出來ないものであり、他方は、金がなくとも生活が出來ると云ふ差であります。又乞食は、金が欲しければ、稼げば得られると云ふ强身もあります。

處が、一方乞食になり得ないルンペンになりますと、假令、一錢二錢でも金がなければ生活が出來ないと云ふ痛手があります。例へば乞食の貰ひ溜めを貰つて食ふとしても、一錢乃至三錢位ひの金がなければなりません。

殊に、餅などは相當高價に賣つてゐますので、所詮、一錢二錢では腹へこたえる程呉れません。

と云つて食はなければ活きては居られません。で、そこに二重の弱身があります。僕が、世の中で一番不幸者と云ふのは、蓋し此の意味です。乞食と同じ物を食ひ、同じやうに露天野宿をしながら、尚且つ金がなければ食へないと云ふ二重の慘めさがあるからです。全く金がなければ、生活が出來ない程、悲慘なものはありません。二日も三日も碌すつぽ食はないで、餅屋の大福餅を睨んで通らねばならない氣持ち。それは到底體驗した者でなければ解るものではありません。

況んや、それが食乞でなくて、まだ社會に充分未練があり希望があり、目的のある人間としたら、果してどう云ふ氣持ちであらうか。書いたり、教へたりして解るものではありません。體驗です、自らが産んだ氣持ちでなければ、本當のことが解りません。理論や、學理でないからです。

此の意味に於て。豐臣秀吉が、「世の中のことは、乞食から天下をとつて見なければ解るものではない」と云つたのは、正に適言です。そして、それと同時に、秀吉のやうに、苦き體驗を持つ者にして、始めて云ひ得る言葉です。又其の言葉が光りもするのです。

秀吉が、歴史上卓拔せる偉人であつたのも其の一面には、かうした苦き體驗が身に泌みてゐたからだと思ひます。さうです。其の廣き體驗が、彼氏をして、最も力強く反映せしめたものと見

なければなりません。

本當に、體驗程力强いものはありません。此の意味に於て、「可愛い子に旅をさせ」と云ふ昔の格言も誠に眞理を穿つております。旅の苦痛、それは教へて解ることではありません。又習つて知り得ることでもありません。事實ぶつつかつて見て初めて、其の深刻な苦しさを知るのです。最も今日のやうに、汽車や、電車や、自働車などの旅なら、却つてした方が愉快かも知れませんが、それにしても他國で舐める苦しみは、又格別なものがあります。

よくエンコなどで見る事實ですが、「私はどこそこの者です、汽車賃だけを持つて上京したのですが、職もなく金もなく、今日で二日も飯を食はないのです」などと云つてゐるのがあります。かう云ふ人達の旅の苦みは、又格別なものがあるでせう。餅屋の前を通れば、大福餅を睨んで通りもしませうし、又飯屋の前を通れば香ひを嗅いで通るでありませう。

何時だつたか、或る田舍出のルンペンが、かう云ふことを云つたことがありました。「わしは或る時、四日間、何んにも食はないで水許り飲んでゐたことがあるが、腹が空いて堪らないので、よく燒芋屋の前を幾度も通つたものだよ、何故つて君、芋屋の前を通ると、燒芋の臭ひがひどく

するだらう、その臭ひを嗅ぐと幾分楽になつたやうな氣持ちがしたからだよ」此の言葉は、僕には多少うなづける節がありました。事實、腹の空いた時きつい臭ひを嗅ぐと食慾の爲めの唾氣がひどく出て來るものです。ですから其の唾氣を飲み込むことによつて、知らず〳〵の裡に吐納法が行はれ、食慾の幾分が充たされてゐるのです。

それは兎に角乞食になり得ないルンペンは、一體どう云ふ生活をしてゐるかと云ひますに、それは固より一様ではありませんし、又階級的にも異つております。つまりこれにも上、中、下の三段位ひには區別されます。が、何れにするも、一日十五錢以下で、生活する方法を求めますと、凡そ次のやうなものがあります。

其の一つは、朝九時までに、辨當箱を持つて、昌平橋の食堂へ行きます。朝飯が八錢です。そして、御飯だけのお替りも、又お辨當も五錢です。ですから朝飯を半分以上食べて、殘りの分と、お辨當箱に詰めます。そして、朝飯の殘りのおかずと、辨當のおかずとを入れて胡麻鹽をかけておきます。これで激しい勞働さへしなければ、一日食ふだけのものは、どうにかあります。つまりこれで我慢すれば、一日十三錢であがる譯けです。

其の二は、朝寢して十一時過ぎに、矢張り昌平橋食堂に行きます。そして、ホワイトか、カレーライス一丁で我慢します。何れも五錢ですから、これを晩再び繰返へすとしても、都合十錢の生活費で事足る譯けです、しかし、これだけでは、屈強な人間としては、空腹を感ずるでありませう。しかし、非常時の場合は、これでも濟ませる譯けです。

其の三は、慥か去年邊り廢業したやうですが、淺草山谷町の處に、滿腹屋と云ふのがありましたが、こゝは個人の經營で、社會事業としてやつてゐたものですから、とても安かつたものです。つまり牛に食はせるやうな、大きな丼飯と、味噌汁一杯と、更らに香の物附きで、一食五錢と云ふ破格な値段でした。ですから假令三度食つた處で、一日十五錢で事濟む譯けですが、これなら二度でも充分我慢が出來たものです。一日二食とすると、十錢で生活が出來た譯けです。しかし、米は最下等のものでしたから、腹の空きは、案外早やかつたものです。

其の四は、淺草は淺草松葉町の武藏屋と云ふ處ですが、こゝも昔から安い家で、慥か明治四十年頃の開業ですが、ヅツと滿員續きの家です。殊に、こゝは他の安飯屋と異つて、米がいゝので、腹の空きが大分違います。

こゝの丼飯は、大が四錢ですから、味噌汁一杯とで、我慢しますと、五錢で一食があがる譯です。ですから一日三度繰り返へしても十五錢であがる譯けです。しかし、非常時なれば二度でも我慢が出來ませう。二度で我慢すると、矢つ張り一日テンセン生活です。

その五は、朝六時までに、寛永寺坂の河合無料食堂へ行くことです。僅か三百人まで、無料で辨當を呉れる譯けです。箱辨當に梅干一つと、おしんこ二切れとが這入つております。飯も二杯分位ひはありますから一食分には充分なります。

別に面倒なことはありませんが、往所氏名を訊きます、そして、一々帳簿に記入するのです。たゞそれだけです。

かうして朝飯の接待を受けたとします。そして、晝飯を二三錢の燒き芋で我慢しておけば、晩に十錢の飯を食つても、十二三錢で一日生活が出來ることになります。

其の六は、朝五時頃までに、上野の永森へパンの切り屑を買ひに行くことです。五錢で山程のパンの切り屑を呉れます。ですからこれを買つてきて、一日中噛ぢつてゐることです。これで充分一日分の食料になります。で、結局五錢で一日の生活がしのげることになるのです。しかし、

それだけに、眞つ暗な時分から列をつくつて待つてゐなければ買ひそこねて終ひます。大抵何時でも、四五十人は列をつくつて待つてゐます。實に壯觀なものです。賣り切れて斷はられるルンペンの失望さを見ると、涙ぐましい感にうたれます。

しかし、以上の生活方法は、必ずしもルンペンでなくとも、普通一般人が、誰れでも容易に出來る生活方法です。否、普通人が、非常時に於てなす生活態樣です。

處が、その五錢もない場合には、それこそ非常方法として、本所邊りの安食堂に行て、二三錢を奮發して殘飯を買つて來るか、乃至は又、乞食の貰ひ溜めを買つて食ふかであります。しかし、こゝまで來ると、最早や乞食と選ぶ處はありません。たゞそれを金で求めるか、同情で求めるかの差に過ぎません。

ですからこゝまで來ますと、氣力の衰へたものは、遂に、紙一重を破つて乞食になります。しかし、最初は、流石に袂乞ひも出來ず、シロイとなつて芥箱を漁り歩いたり、山の手邊りの邸街へ出稼ぎして、戸毎に貰ひ歩くのが、先づ最初の試みであります。かうして修養することによつて、精神も、肉體も、すつかり乞食になつて終ふのであります。そして、其の結果、お醫師樣も、

有馬の湯も、おつたまげる程の奇蹟的な肉體となり、同時に又、精神も痲痺して、不抵抗主義の人間となつて終るのです。

處が、氣力の旺盛な人間は、乞食中でも最も始末の悪いタカリ、即ちバタ公となつて、仲間に暴行脅迫を加へたり、掻つ拂ひをやつたり、其の他反社會的な行爲をして生活してゐるのです。

ルンペンの極樂
（淺草公園）
（昭和六年三月撮影）

最も今日では、エンコに於ても、其の取締りが嚴重を極めてゐますので、かうした不良兒は、大抵おつ拂はれたやうです。

四、乞食戰術の變遷

大東京のハラワタとして淺草には、最もハラワタらしい醜さが幾つも轉がつてゐます。その一つが、乞食の集團です。最も今日では可なり清算されてはおりますが、今から二三年前までは、可なりの勢力を以て、ぐん／＼と賑つて行つたものです。しかし、單に乞食と云ひましても、屢々申上げたように、さま／＼な階級的な類別がありますので、從つて、其の戰術に付いても、自ら異つております。しかし、こゝでは、其の中でも最も戰術に變化の多い袂乞ひ―彼等の仲間で云ふツブと、乞食になり得ないルンペンの戰術とに付いて述べることにします。

古い處から申上げますと、明治時代の乞食にありましては、それがケンタであらうと、ツブであらうと、總てが千遍一律の戰法で、消極的な同情以外に、何ものもなかつたものです。

最もその頃から、少し頭のいゝものは、子供を利用して、衆人の同情を増し、異想外の利益を獲得してゐた乞食は、事實少なくなかつたやうです。しかし、それにした處で、消極的な乞食の本質から、一歩も出ては居なかつたものです。

そんな譯けで、明治時代には、子供の賃貸借や、子供の市場などが立つて、頗る珍なる光景を描いてゐたものです。そして、其の當然の結果、當時にあつては、不具者であればある程、ひど

く貴ばれ、馬鹿であればある程、衆人から愛され、よく泣く子供程、高く貸し附けられたものです。

つまり不具者であり、馬鹿であり、更らによく泣く子供程、消極的な、乞食の戰法にふさわしく出來てゐるからです。殊に、消極的な、同情一點張りの戰術を以て、そのスローガンとしてゐた明治時代にあつては、無論、これが無二の戰法として貴ばれたものです。

とりわけ子供を借りて來て、其の子供を泣かせ、衆人の同情を惹起し、異想外の利益を獲得しようとするが如きは、慥かに消極的な乞食戰法の一つには違いがありませんが、しかし、其の頃としては、新らしい戰術の一つであつたのです。ですからこれが、とても流行し、物日などには、大金を出して、子供を借りて出かけたものです。今でもそうですが、其の頃の大衆達は、殊に善良であつたから、其の子供が、借り物だなどとは、夢にも知らなかつたものです。全く純朴其のもの〻やうな大衆だつたのです。

處が、世の中が物質文明となり、だん〳〵と世ち辛くなつて行くに從ひ、人情は輕薄となり、大衆達は精神的にも、物質的にも、多くの餘部を持たなくなつて來ましたので、乞食仲間に於ても、爾來の如く消極的な戰法一點張りでは、物にならなくなりました。全く今日の大衆達は「右

や左の旦那樣」では見向もしない有樣です。わけも物質文明の半面に橫はる處の生活難が、彼等乞食仲間まで押し及ぼし、軈ては彼等の生活までおびやかすことになりました。

そこで頭腦のよい乞食の中には、さま〴〵た戰術を考案し、爾來の千遍一律の戰法を棄て、積極的な戰法をとる者さへ出來るやうになつたのです。これも世の進化の一つです。

ですから乞食風情に、何が出來るものかと見くびつてゐると、其の見くびつた乞食の口車に乘せられ、知らず〴〵の裡に、懷中物をはたいて終ふと云ふ世にも不思議な事實があるのです。

東京が江戶であつた時代は、生き馬の眼玉を拔く者があつたそうだが、今日の東京は、乞食風情が、生き人間の眼玉を拔くと云ふ、さても恐ろしい世の中です。本當に油斷も隙もあつたものではありません。

では、どう云ふ風に、それが進んだかと云ひますと、結局、大衆の頭が、感覺的になり、同時に、獵奇的になつたやうに、彼等乞食の戰法も、感覺的となり、獵奇的な弱點を捉えるやうになつたのです。

つまり服裝だけは、大衆の方がきらびやかだが、頭の働きになると、醜い存在の乞食が、遙か

に上手を越してゐるのです。それ程、現在の大衆は、頭が空つぽで、形式だけが、きらびやかなのです。全く考へざるを得ません。全く人間的な學問になると、乞食に劣るわれ〳〵大衆なんだから、虚を去り、實に就かなくてはなりません。

兎に角、御參考迄に大衆を見事いひ負す處の彼等の新戰術の二三を例示的に御紹介しておきませう。

五、乞食の新戰術

乞食戰術の變遷は、先づ大體以上の如く、消極的戰法から、時代の進歩と共に、積極的戰法にまで押し進めて行つたものです。全く昔ならカツタイ坊主でも見せて、「右や左の旦那樣」を連發してゐさへすれば、充分仕事になつたものです。

處が、感覺的な、今日の大衆には、そんな鼻についた方法では通用を感じないので、遂に頭腦のよい乞食によつて、大衆の急所を衝く處の戰法が、次々と編み出されたものです。ですからその例は、決して二三に止りませんが、其の中でも珍らしい處を擧げますと、次のやうなものがあります。

其の一つは、嘗つてエンコの名物男の如く云はれてゐた活辯の清公の戰術の一つです。無論、今日はエンコにはゐませんが、彼が得意な時分、劇場や、活動館の裏方の名前を覺えると、「おい、何々君、ゐるかね」と矢鱈に呶鳴つたものです。

無論、其の時分、惡戲けて云つてゐるのだと思つてゐたら、實はさうでなかつたらしいのです。と云ふのは、假令、名物男にしろ、さうしたルンペンから親しい友のやうに呼ばれることは、殊に、見榮坊の者にとつては、堪らない羞耻です。そこで見榮坊先生、こつそり蔭に廻り、「おい、清公、あんなこと云つちや不可んぢやないか、此度からあんな呼び方したら承知しないぞ」と云つて、幾らかの金をやつて口止めした者があつたのです。

ですから彼清公は、其の味を覺えて、矢鱈に呶鳴り歩いたものです。つまり相手の弱點を衝いて、不當の利益を得た譯けです。しかし相手の見榮坊先生、それが乞食新戰法とも知らずにゐるとは、さても痛快な世の中であります。

其の二に、前に申上げた處のカツタイ坊主と、トリ眼の芳公とが組んでやつた仕事です。これも可なり古い話ですが、群集心理を應用して、見て居る間に、大衆達から、

圓助を捲きあげるなどは、全く見あげた腕前だが、乞食新戰術としても珍らしいものでした。

其の三は、少々反社會性を帶びた戰法ではありますが、しかし、其の結果から云ひますと、嘗つて例のない程、多くの稼ぎをしたものです。無論、今日は其の姿を見ませんが、二三年前には、殆ど毎日のやうに、六區の街を幾度びともなく徘徊して稼いでゐたものです。

何れにするも、世の中が科學的になり、哲學的になりますと、乞食戰術も矢張り、科學的となり哲學的になつて行きます。少くとも其の戰法が、著しく進化し、心理學的に立脚して、人の急所をしつかりと握るやうになつて來ました。しかし、それは決して不思議なことでもなければ、又別に不可思議な事實でもありません。何故なら、彼等乞食と雖、人間である以上、人智の進化に何んの變りもないからです。

恰もそれを立證するやうに、乞食戰術として、最も新らしく、しかも亦、最も合理的で、頭腦のよさを發揮した方法が編み出されてゐます。それは外でも有りません。常に六區の街を幾度びも往復してゐる三十五六の瘦せぎすのルンペンに絡る新戰法です。彼は大抵何時でも劇場關係の印袢天の古物を着てゐますので、ちよつと見た處、下足の下廻りのやうにも見えるし、又失業者

のやうにも見えますが、何れにしても瘦せぎすな、そして、弱々しい不健康さうな男なので、一瞥した丈けで、既に何パーセントかの同情が集まる體のルンペンです。彼の名を不覺にも失念したので、假の名を源公としませう。

彼源公は愛嬌こそ持たないが、氣さくで、無頓着で、誰れにでも少しの容赦もなく口を利く男なので、案外評判になつてゐました。しかし、服裝の穢いことと、其の容貌とは、どうしても乞食の型から離れない、其の源公がプチブルと見たら、誰れ彼れの容赦なく「濟みませんが歸るのに電車賃が足りないんですが、四錢だけ呉れませんでせうか。」とやつつけたものです。

又時には「昨日から一度も飯を食つてないんですが、八錢恵んで呉れませんでせうか。」と言ふこともありました。

又或る時は「おつかあが病氣してゐるので藥を買つてやりたいんですが、七錢だけ呉れてやつて下さい。こゝに三錢は持つてゐるんですが、藥が十錢するのでね。」と三錢出して見せたりしたものです。

そうかと思ふと又「嬶アが昨夜お產したので、どうしても二十錢だけ持つて歸らなければなら

ないんですが、此の通り十二錢しかないんで困つてるんです。濟みません、八錢だけ貸して下さい。お願ひします。」と哀願することもありました。

又かういふ風にも切り出して行く。「實は今日働いた四十錢の金を落して了つたんですよ。」家にはお母アや、子供が腹を空かして待つてゐるんですが……旦那濟みません、幾らでもいゝんですが惠んで呉れませんでせうか。あつしやバタヤなんですがね。」と如何にも哀れさうな表情を示したりしました。

かういふ風に、彼源公は幾通りかの方法と、理窟とをつけて强請るのでありますが、不思議にも彼は、故意に半端な金を强請るのです。が、しかし、よく考へて見ると、そこが彼の頭腦のよさを表示するものです。つまり心理學上の立場から、人の急所を摑み、其の弱點をしつかり握つてゐることが解るのです。何故なら、人が同情して出さうと言ふ以上、四錢と言へば五錢を出し、八錢と言へば十錢を出すのが常です。殊に往々にして小錢を持たぬこともあり、まさか釣り錢を寄越せとも言へず强請られた以上に出すのが人情であります。

又三十錢乃至四十錢のガマロを落して、親子が食ふに麻胡ついてゐるから幾らでも惠んで呉れ

と言ふことも、慥かに人の弱點につけ入つた言葉です。と言ふのは、さうした場合に、惠まうといふ以上、落した丈けの金を償つてやるのが人情で、殊に三十錢と言へば、五十錢を出し、四十錢と言へば、無論、五十錢を出すのが常です。わけても極く氣前のよい、プチブルなど、得意になつて圓助を投げ出し、いゝ氣持ちになる連中も少なくありません。

それに彼源公が、目星をつけて言ひ寄る以上、相手の何ものであるかを的確に判斷してかゝつてゐるので、少くとも十中六七までは成功したらしいのです。そんな譯で、他の乞食達が、せい〴〵二三十錢しか稼がないのに、彼は大抵四五圓を稼いたものです。又物日とかまのよい日など、樂々と六七圓も稼いで涼しい顏してゐたものです。

かう云へば全く嘘のやうに思はれますが、それは次の事實によつて、明かに立證されます。と云ふのは、或る日、某劇場のK氏が、「おい、貴樣、今日幾ら稼いだ」と訊きました。すると彼曰く「今日は駄目です、たつた一圓しか稼げないんです」と哀れつぽく答へました。「馬鹿野郞、ふざけやがるない！」とK氏呶鳴ると、いきなりルンペンの頰を厭と云ふ程打ちました。そして「貴樣は何んでそんな嘘を云ふんだ」と、又一つぶたうとしましたので、彼氏ルンペン驚いて、「へえ、

濟みません、四圓二十錢です、四圓二十錢です、」と、云ひ〳〵逃げ出したものです。

又彼は決して土地の者には、强請りませんでした。こゝにも彼の非凡さがあるのです。土地の者に强請つたりすると、直ぐ觀破されて、遂には、横つ面を幾度びかやられるからです。彼はそれをも知つてゐたのです。終りに臨んで一言しておきたいのは、若き不良の言葉です。

「あんた方は、二日目には、直ぐ眞面目になれ、眞面目になれつて云ひますが、眞面目に働くやうになつたら、第一煙草だつて喫めやしないし、女郎買ひだつて出來やしないぢやありませんか、六十錢や、七十錢の日給で、何が出來るのです。かうして遊んでおればこそ、煙草だつて喫めるし、又時には女郎買ひだつて出來るんぢや有りませんか、だから已れ達に眞面目になれなんつて云つたつて駄目ですよ。社會制度が惡いんですから。」

彼は臆面もなくかう云ひました。つまり遣ひ出し(脅迫)などをして、ぶら〳〵してゐると、働くよりも金になると云ふのですが、これは決して聞き捨てにならない言葉だと思ひます。何故なら、市民一般が今少し警察との交渉を敏捷にし、かうした者に、金を出さなくすることが、彼等不良兒を根絶することになるからです。

附録

一、はしがき

佐藤紅霞

一口に乞食といつて仕舞へばそれまでだが、乞食だからと云つて何も生え拔の者ばかりはありはしない、晋の豫讓の如く、仇敵をねらふ爲に、身を乞食に置いたものもあり、印度の釋迦でさへ一度は乞食の生活を爲たと言ひ傳へられてゐる。獨り東洋のみならず泰西の神話、傳說、童話等にはある希望を持てる人物が一時賤人に身を落し、刻苦辛酸を嘗めた後遂に王者とまでなつた者を物語つて居るのは何を吾人に示さんとするのであらう。乞食とさへ云へば世人は冷かなる心情を以て之に對するが、それは實に笑ふべきことであつて、むしろ彼等から學び敎へられる處も尠くないであらう。左に江戸時代の乞食に關する事實逸話並に我國古來の俚諺を紹介する。前者は去る明治四十三年發行の『大阪滑稽新聞』自第三六號至第三九號に載つた『珍物乞食傳』より

又、後者は熊代彦三郎氏編著『俚諺辭典』より拔萃したものである。

二、江戸時代の乞食氣質

（一）乞食樂阿彌の愛宕詣

見しは今、樂阿彌とて江戸をあるく乞食あり、狂言綺語を云ひて人の心をなぐさめ、扨て又

隱家はこゝろの内にあるものを
　知らで山の奥に入るらん

と讀める古き歌に節をつけて歌ひ、町をあるき廻れば、一日に錢を百も二百も貰ふ。

或時樂阿彌、町へ出でゝいふやう

『我れ今日の貰ひを半分取らせ、小者を雇はん』

と云ふ、樂阿彌が錢貰ふ事かくれなければ、賃取出でゝ雇はるゝ、樂阿彌は常に赤手拭にて頭を包み總じて興がる姿なり、小者を連れ、小歌をうたひ、町を廻り、萬の殘飯、魚の切り屑、何にても人の呉るゝ物を取りて持たせ、日も暮れぬれば半分小者に遣り、半分にては己れが一日の口

を養ひ、扨、手を打ち敲いて、表の辻、彼處の道の邊りに臥して夜を明す、又或る時は樂阿彌小者をも雇はず、ひとりあるきをなし、錢を一貫計り持ち首へかけてあるく、人是を見て、扨は樂阿彌は恰悧くなり、欲をも知りたるかと思ふ處に、樂阿彌傳馬町へ行き、毛よき馬を借り、鞍置かせ萬道具を借集め、日本橋に立ち出で、大音あげて云ふやう

『今日は廿四日、樂阿彌が愛宕參詣なり、小者仲間を雇はん』

と呼はる、日本橋の事なれば、賃取ども我も〳〵と云ふ儘に百人計り集り、樂阿彌を押つ取り卷いて頰振り上げ、聲を立て雇はれんと云ふ、樂阿彌四方を見廻し、健よかなる若ぎ者、侍がましき者共をかひ撰り〳〵錢を取らせ打つ立つ、其日の勢揃ひを往來の人が留まつて群集を爲して見物する。先づ鑓持長刀持弓鐵砲鋏箱指換の刀擔がせ、四邊に若黨四五人連れ我が身は馬に打ち乘りて兩ロ取らせ、愛宕へ參詣するこそをかしけれ。

知らぬ他國の道行人は大名の御通りとて恐れを爲してぞ通しける、愛宕の山に登りては何事にても樂阿彌が願ふ事こそなけれとて、大酒飲みて日暮るれば愛宕の山を下向して日本橋に着きにけり、馬より下り樂阿彌は暇申して、賃取達さらば〳〵と手を打つて、四方へ散りてぞ失せにけ

る、町の人々是を見て、誠に樂阿彌とは幸くこそ名をば付けたりと云はぬものこそなかりける。

（慶長見聞集）

（二）門に立つ狂歌坊主

安永天明の頃江戸四谷天龍寺門前に狂歌坊主といふ者ありけり、原は豪家の子なりけれども、私欲に耽る事をきらひ、家を棄て竟にかゝる身となり其のところに小さき小家を借て住し、日毎人家の簷に立ちて一錢を乞ひあるく、其一錢を貰ふ時は狂歌一首をよむ、世人これを狂歌坊主といふ、詠歌もつともをかし、其頃目黒日紋谷といへる處の、一寺の仁王殊の外流行して、これに立願する者は効驗著るしとて夥しく參詣群集し、夜は籠りとて通夜する者いと多かり、或人狂歌坊主に、この日紋谷仁王を題して詠むべしと云ければ、取敢ず

日もんやの仁王さんでもしやつたか
　ぢゞやおばゞがこもりとぞゆく

當時堀の內村妙法寺の祖師堂、これまだ大に繁昌にて日毎參詣たゆる間なし、或人是を題して詠むべしと云ければ取敢ず

堀の內日蓮大ぼさつま芋
　まゐるひと山さん門のうち

亦或る人五歳になる男の子の祝せんとて衣服等美くしく縫はせ、準備こと〳〵く整ひ翌は霜月十五日なり、產神へ參詣いたすべしと樂みて寢たりしが次の朝かの男子とく起て外面に出でけるが忽ち一つの包袱を拾ひ來たり、父其包袱をとりて披き見れば、裡に袈裟と法衣と數珠とあり、父大に氣色を損じ、今日祝して神社へ詣でんとするに斯る忌々敷物を拾ひ來りし事甚だ快よからずとて、當日の參詣を止にして酒打喫て臥居たり、時節門口へお馴染の狂歌坊主にて候と云來りける、主人此聲を聞とひとしく走出、狂歌坊主を呼で曰く、我今日男子が祝にて產神へ詣させんと思しに、圖らずも今朝此子外面に出ゝ袈裟と法衣と數珠を拾ひ來れり、我甚だ心持よからず、萬望祝てめでたき狂歌一首よみて吳れよと云ければ、狂歌坊主其辭ともろともに

けさひらふころも霜月十五日
　この子のとしも數珠のかずほど

と詠ければ、家主大に悅び錢多く取らせて皈しけり、都て皆斯の如く何によらず題を聞ときは其

聲に隨ひて詠いづる、尤も逹吟なり、一首一錢に換れば錢八百文貰ふ時は狂歌八百首を詠なり、夕暮家に歸れば貰ひし錢にて種々の食物を買て住ほとりの老人又は幼稚ものなどに分ち與へて食はしむ、いさゝかも吝惜の心なし、今日貰ひし錢翌まで貯へ置く事なし、次の日はまた疾く起き出狂歌よみて貰ひあるく。（百家琦行傳）

（三）賢なる乞食の振舞

延亨五年戊辰春正月十三日の夜の明がたに、大阪四ツ橋にて、そのほとりなる非人金五十兩拾ひしに、その包がみに宇津屋氏と書きつけてありしかば、隈なくたづねて、終にそのぬしに返しけり、金のぬし歡びて、謝物として金子少々とらせしかども、つや〳〵うけず、よりて又酒代として鳥目三貫文つかはしゝに、左の詩を相添へて、その鳥目を返しつゝ、非人は行衞知れずとぞ

橋上路邊一二錢　往來終日幾千人
死生富貴任天命　昨日錦今日草筵

たからぞとおもへば袖につゝみけり
もらへばおもき障りなりけり　（兎園小說）

（四）風流なる乞食の茶碗

路通はいづれの人なることを知らず、若かりし時放埒のあまり、人に物乞ふ身となりて、近江國鳥籠山の麓にありし頃、芭蕉彼國を行脚して、此邊の茶店にやすらひしに、其傍に臥したる非人が枕元にありし茶碗を見るに、世の常の品ならねば心に不審してもの云ひかけ、風流の話に及びしに、扇に一首の歌をかきつけ芭蕉に見せけり、其書も亦賤しからず、則ち其歌は

露と見るうき世を旅のまゝならば
いづこも草の枕ならまし

是れより翁の門人となりて、名を路通と改め難波に住ゐけり。（新編歌俳百人撰）

（五）江州非人頭の高潔

ある人江州へ行き侍りしに一の非人村あり、其所に橋の渡り初めありしを、立止りて見侍りしに非人頭とおぼしき者、圓座してありけり、村の者共、橋の渡り初めの祝儀を持來る、其中より痩て色惡き男一人、茄子三つ持來て頭の前に進む、頭たる者これを見て、汝は頃日相煩ひ居ると聞しに、何とて此茄子る持來るやと問ければ、左樣に候、永々の病氣、難義仕候處に、此度橋の渡

りぞめに付、頭殿へ祝儀をいたすべきよし、小頭より申渡し候故、夜前他處の畠へ行き盜み申候といふ、頭のいふ、乞食は盜をせまじき爲なり、盜をなせば、乞食はせず、汝は村の住居はなるまじきと云て小頭を召て、彼が快氣次第村を拂ふべし、病氣の内は番を致すべしと云渡しけるとかや。(一話一言)

(六)雲井に殘る乞食の言葉

寛文十二年四月上旬に、洛東三條橋の下に、廿歳あまりの乞風の女自害してけり、かたはらに書殘せる一首あり

ながらへばありつる程のうき世ぞと
思へばのこる言の葉もなし

とありし事都に隱れなきことにて、有難くも天上の御沙汰に迄及びて、ある貴き御方和せさせ給ひ

言の葉は長し短し身の程を
思へばぬるゝ袖の白露

なきと詫る其言の葉の殘るさへ
聞くに涙の袖にあまれる

さりとも和歌の徳いふも更なりと、聞く人ごとに涙せきあへず侍りき。(皇都午睡)

三、乞食に關する俚諺

乞食が馬もらつたよう。
有難迷惑の事。

乞食根性。
人の物を孕頤る者をいふ。他より物を貰ふことを知つて、人に物を與ふることを知らさるもの

乞食小屋へ富の落ちたよう。
曾て豫期せざりし得る所ありて、望外の喜びに逢ふことをいふ。富は富くじにて無盡の事。

乞食に氏なし。
人に食を請ひて、生活をするも、もと己が其產業を治めさるの致す所にして、先天的に乞食た

るものにあらずとの義。

乞食に筋なし。

西鶴の胸算用及び名殘の友に見ゆ。

乞食に種なし。

前の諺に同じ。

乞食に朱椀。

分に過ぎたる物を所有すとの義。

乞食に膳椀。

前の諺に同じ。

乞食に貧乏なし。

極端と一致するを云ふ。乞食より以上零落する事能はず。されば天下至る所を我家とし、金殿玉樓を廣しと思へる貴人の心の憐れに思はるゝに至るなり。

乞食の朝祝。

如何なる身分の人にても、吉兆を祝ふを云ふ。

乞食の朝謡。

一日の中、朝は最も心忙しき時にて、歌など歌ひ居る暇無きに、乞食は家も無く、仕事も無ければ、却つて氣楽なりとの意。

乞食の馬を買つたよう。

身分不相應なる物を買ひし喩。

乞食の大連。

乞食は成るべく離れ〴〵に、ならざれば得物少き故、大連になる事は、施行抔非常なる事ある時に限る。

乞食の米をこぼしたよう。

貧乏人灰撒けば風が吹くと云ふ如く、窮者の尚窮するをいふ。

乞食の斷食。

悪しき事、醜なる事を強いて善美に言ひなす事。

乞食の友擇び。

持つべきものは友なりと、兼好法師も言はれあるは友は自己の利益になればなり。乞食が乞食の友を持つ、何れも己を利するものなき樣思はるれど、尙彼等の間にも損友益友の別あるをいふ。

乞食の麥嫌ひ。

死にたいと麥食ひたいと程大なる虛言なしと云ふ如くに。麥飯は乞食も嫌ふとの事にて如何に零落するも尙ほ好厭の情あるをいふ。又身分をも顧みず氣まゝ榮燿をするをいふ。

乞食のお粥。

言ふばかりにて實行せざる事。乞食の粥は湯ばかりで實少し湯ばかりと言ふばかりとを通はせたるなり。

乞食は長生の種。

飽食暖衣は却つて命短し、と云ふ反對の語。

乞食も場所。

如何なる職業にても、都會にてなせと云ふ事。

乞食も米の飯を食ふ。

『元曲選』馬陵道雜劇。『常信道、口設ニ尊卑一。』

乞食も世界よかれ。

如何に零落するも、全く世を忘れず。世の善からんことを願ふなり。

乞食三日すれば止められぬ。

賤しと思ふ事の却つて樂しく、人に厭はるゝ事の却つて人に好まるを云ふ。

乞食嚇。

容貌獰惡の男をいふ。

乞食しても場でせい。

乞食も場所を參照せよ。

乞食袋と西の風は晩ほど大きくなる。

越後地方にて夕方に至り西風の强くなるをいふ。乞食は物を貰ひだめて、夕方に至れば益大き

くなるなり。

鍬かたげた乞食は來ないが、書物を提げた乞食が來る。

不生產的の業よりも、農業を執れとの奬勵。

三人寶引の獨乞食。

三人にて寶引するときに、一人は必ず負くるものありとの義。

障子一枚外は乞食。

如何なる高貴の身分の人と雖も、一度其位を失へば窮境に陷るをいふ。

賴む乞食が馬に乘らぬ。

依賴すれば人は傲慢となるものなりとの義。

往大名に歸り乞食。

往く時金を持ち、歸る時は既に費消し盡したること。遊女通ひする者の類をいふ。往く時は勢よくして大名の如し、歸る時は勢なくして乞食の如しとの意。

雪の翌日は乞食も洗濯をする。

雪降りし翌日は天氣清朗なりとの義、降雪の翌日は天氣清朗なる故乞食が喜ぶとなり。

朝乞食と夕坊主。

朝乞食に出逢ひ、夕坊主に出逢へば緣起よしとなり。

親苦子樂孫乞食

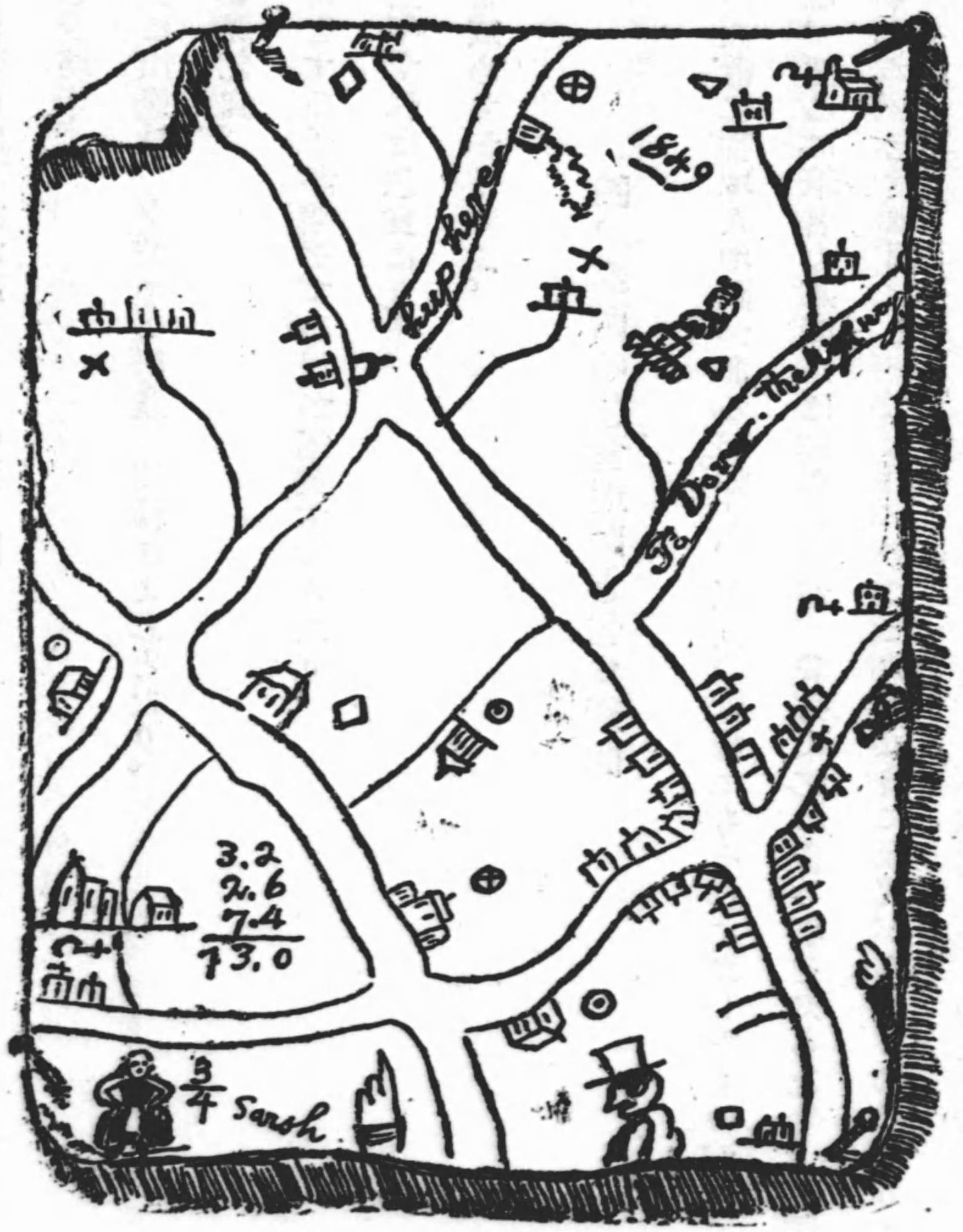
親が苦をする子が樂をする孫が乞食するとなり。

岡惚を三年すれば乞食になる。

岡惚を戒めてかくいふ。

四、泰西の乞食地圖と乞食新聞

吾々の社會に番地人地圖があるが如く、乞食の社會にもそれに類したものが無くてはならない筈である、然るに筆者の寡聞かは知らないが、我邦に之れある事を知らない。英國にはカッチャース・マップ（乞食地圖）といふものがあつて彼等社會に重寶がられてゐる。左に揭げたものは一八九四年發行の『新版隱語辭典』に載つて居たものを模寫したものであつて



圖中の記號

× は不可。餘りに貪し、而して何から何まで知り拔いて居る。

止れ。――若し彼等の欲する物を持參するならば、彼等は汝の手からそれを買ひ取つて吳れるであらう。彼等は『わけ』知りだ

此方面に行け、他の方向よりも望みあり。

◇ 好し。『おもらひ』はきつとある口數を多くきくな。

▽ 惡ろし、餘り多勢が行つて荒して居る。

□ 駄目、うつかりすると捕まる。大に注意せよ。

◎ 危險なり、惡くすると一ケ月位は『豚小屋』にたゝき込まれる恐れあり。

⊕ 信心家なれ共、總ての點に於て大のしまつ家である。

右の乞食地圖は、ケント州、メートストン地方で發見されたものであつて、多分スクリーヴア（放浪の大道講師）が描いたものであらうと云はれて居る。他圖の下方左にはトラベー（仲間）の手になつた普通四分の三サラーとあだ名されて居る『愛人』或は『著名な女』の繪がある。何う

してこのやうなあだ名を持つて居るのかといふに、乞食宿で通常演ぜられる一種の踊りに由來するものであらうと考へられて居る、其の上方に三人の乞食の收入が記錄されてゐる。數字の現はす處によれば彼等の一日の收入が合計十三志あつたことになつて居る。それから右端に彼輩の正しい寫生がある。圖中の記號には一々說明がして無いが、これは乞食宿の連中は幼時からその意味を呑み込んで居るので、要用を感じないから除かれてあるのである。若し地圖の全々無い場合には宿の老主人が『カセギ』所を一々示することになつて居る。そして何所の家へ行けばたんと『おもらひ』があるといふ事を語つて聞かせるのであると云はれて居る。

又、亞米利加（？）の或る都會では乞食新聞なるものが發行されて居て、それには何日何時にはどこそこにて何家の結婚式あり出產祝あり、葬儀あり等々種々乞食の『おもらひ』に利便な案內を揭げ、又彼等の『商賣』に必要の智識を滿載すといはれて居る。發行者はカトリツク敎の宣敎師であるとの事であるが、一寸面白い社會事業だと思ふ。

2.27

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

奧付

乞食裏物語

定價一圓三十錢

著者 石角春之助

東京市京橋區京橋二ノ七中川ビル
發行者 多田鐵之助

東京市芝區濱松町一丁目十五番地
印刷所 兵林館印刷所

東京市芝區濱松町一丁目十五番地
印刷者 佐藤廣太

東京市京橋區京橋二ノ七中川ビル
發行所 丸之內出版社
電話京橋(56)8088番
振替東京64586番

版權所有

2494
247

599
41/1